

尾張名所圖會

後編

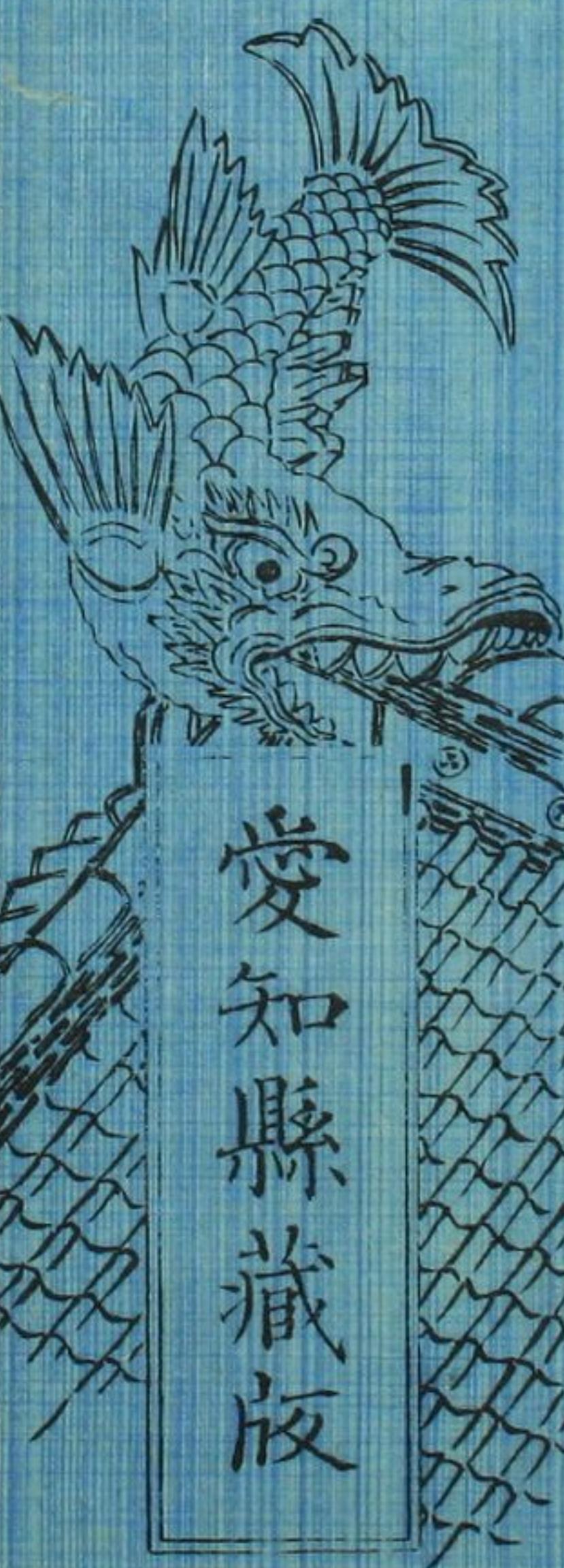
一



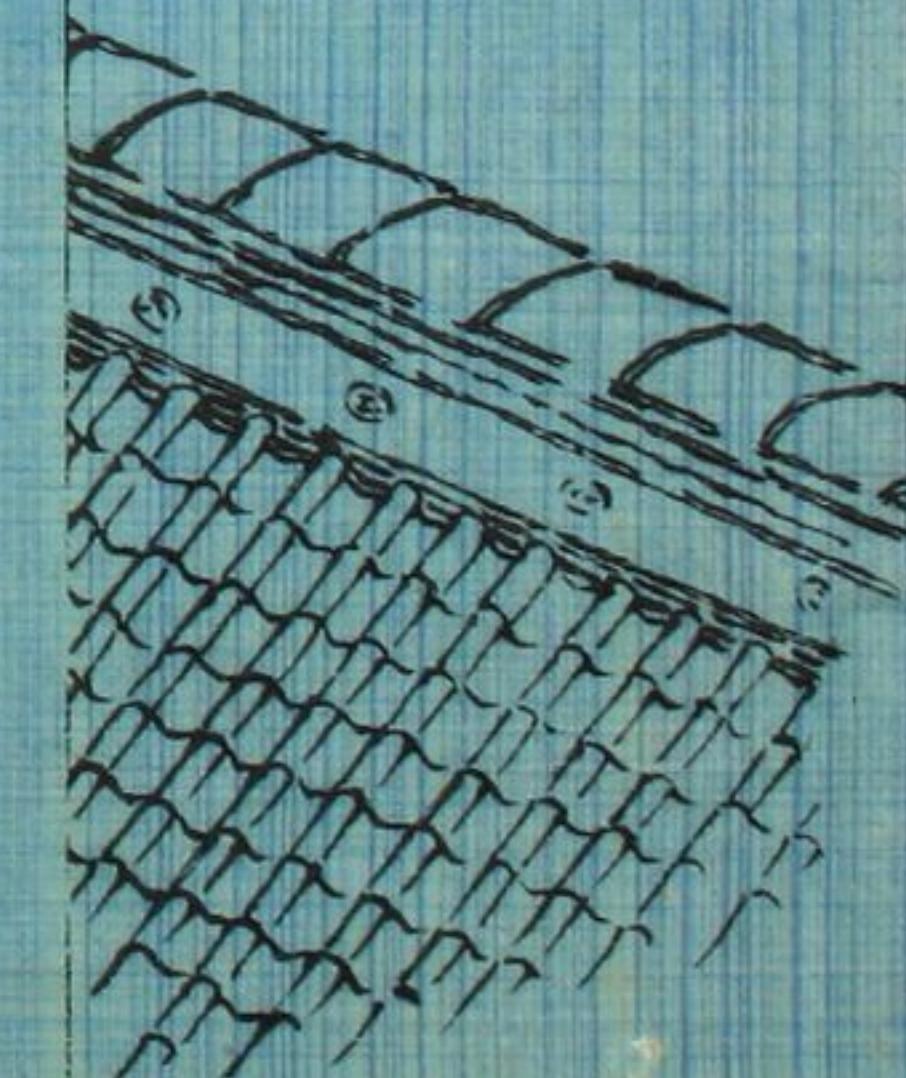
# 尾張名所圖會後編

岡田啓道直遺稿  
小田切春江并補繪  
圖畫

明治十三年九月出版



愛知縣藏版

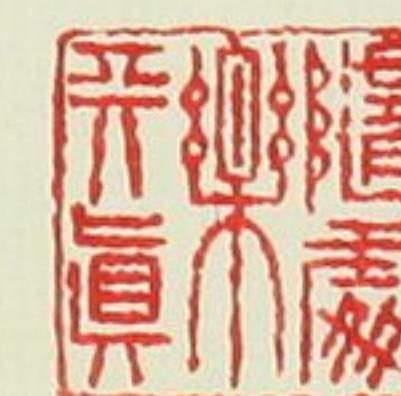


卷之四

卷之四

卷之五

庚辰二月  
空谷草堂



唐張名所園繪後編序

而史之為體大者必記小者或  
漏其所涵之瑣事而猶有可以見風俗人心之微麗焉者是  
乃裨官小說之所以為不可度  
也耶屬者當切春江未眎

以至張名所圖修後獨曰雜  
瑣々之冊額見乾而其標頗  
芳子以為有和平則請為  
不言披而閱之則勝區石蹟  
浩繁悉舉古風舊俗之情  
狀歷然于圖江紙上矣凡按

地誌者徵諸記牒及傳聞者  
為多而親身之地驗其實  
者無幾故記風俗叙事蹟  
或得或湏今如此編則是  
踏其他目錄其獨倚諸好  
光及舊籍所謂名覈之而

圖成孰完<sup>レ</sup>而書具<sup>レ</sup>者或之  
以補地法之一隅歟抑子思之  
治化之要本之於民情之微  
觀之所制未嘗不根其  
俗之由來蓋記錄固當之  
於古風舊俗其所紀威寧

深故為治者有以資焉然則  
此編既可以備史家據搜又  
可以供治者參考豈謂  
之非兒玩也哉乃揭其所以  
益于世者書之於首簡

明治庚辰二月

國自彌之守撫

國朝  
社  
88  
御禮

醉  
印

幕原眉山書

醉  
印

序

醉

有大木石乎此當人挽送一人  
唱詠許衆應而和以轉之又  
易多其挽者安之力也使  
挽者一人之能而使幕之化固  
同具諸之力也故名鄉  
村之執牛耳而耕種宰

剗之未免至一失體究將革故  
斯皆貽後生以任俠者也而  
而猶以之助大奸成喧嘩之  
風所徒子則吾不知其一而為  
此區々之舉何余曰吁今雖禁  
名而圖繪者大滿固可之是  
名是古者在本紀述志也圖

弦以為妙名名匠陳謹雅事  
其諱因祀亦源以傳至宋即  
於聖使入祀周之先也乃據  
修多且據一脉名在宋故之地  
之故城俎而諱獨創名後不競之  
業而為昇平之瑞蓋先據一脉  
今之名也耳此誠取之也

厥初之年固為多渴時其後  
雖消此分之薄訛亦漸增其武  
立生同學以是之故每江門多客  
極居多是文園其才藻富贍  
率以邦房已自之器前編之引已  
一贊之今不復言上因應幸至之  
多精以其所作以引示余曰此

嘗知其待簡寡譽之勤而味年物故  
裁之年之多相以之勞異時後編上  
本之日歲傾多以心序多寡詰解請書  
勿拒吾與參始四十季周以大政也凡以  
多寡而精一毫本已技全文園極居  
未足先其同學之存其獨春江一人已  
久矣以之都勞神以之哉余寒

武劉玉水之山四神不仁之症死期在  
旦夕而程氏故遺卷成業之日乃之  
序乃之猶多書之感考而述序以詒  
十三年夏一日七十有三歲極軒中

曰清輝題



即庚辰時年六十九五



吉川山屋居士詩圖卷題寫刻  
于甲子之秋之日  
程氏  
經角之吉川山屋居士詩圖卷  
物不知其所有也  
每念之  
未可盡之  
亦未可不  
知之  
亦未可不  
知之

のまくらにやうじゆをもつて  
おあくやうてはなむかたのよおひ  
とくにあはるまことせん  
せんそく がくじゆくひと、國語  
せんそくのまくらにやうじゆを  
ゆまのゆまくらにやうじゆを  
きくわくわくわくわくわく

此處を程 おほきくねが  
えいごのまくらにやうじゆを  
かくわくわくわくわくわく  
けく

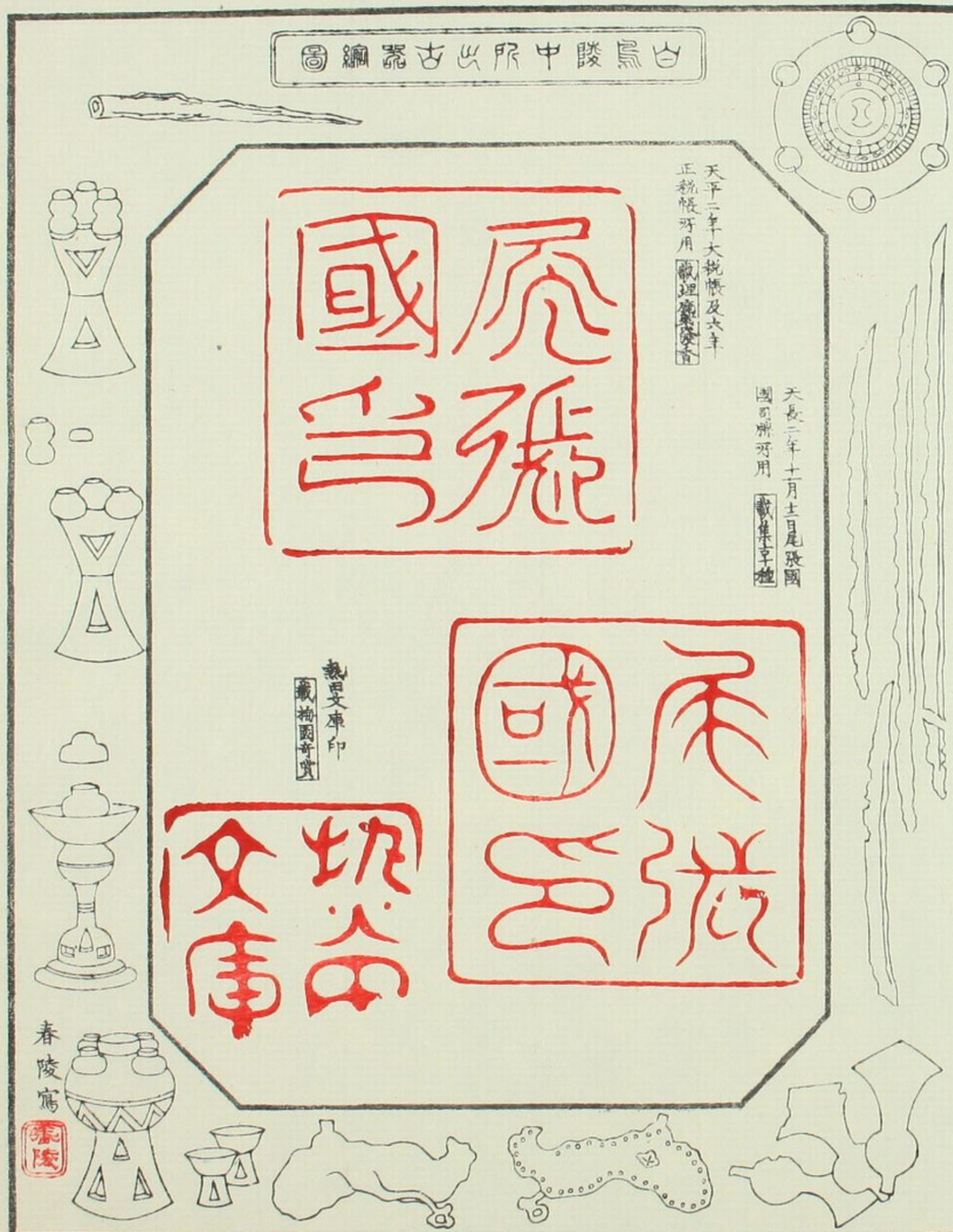
用意を道

尾張名所圖會後編卷之一

目錄

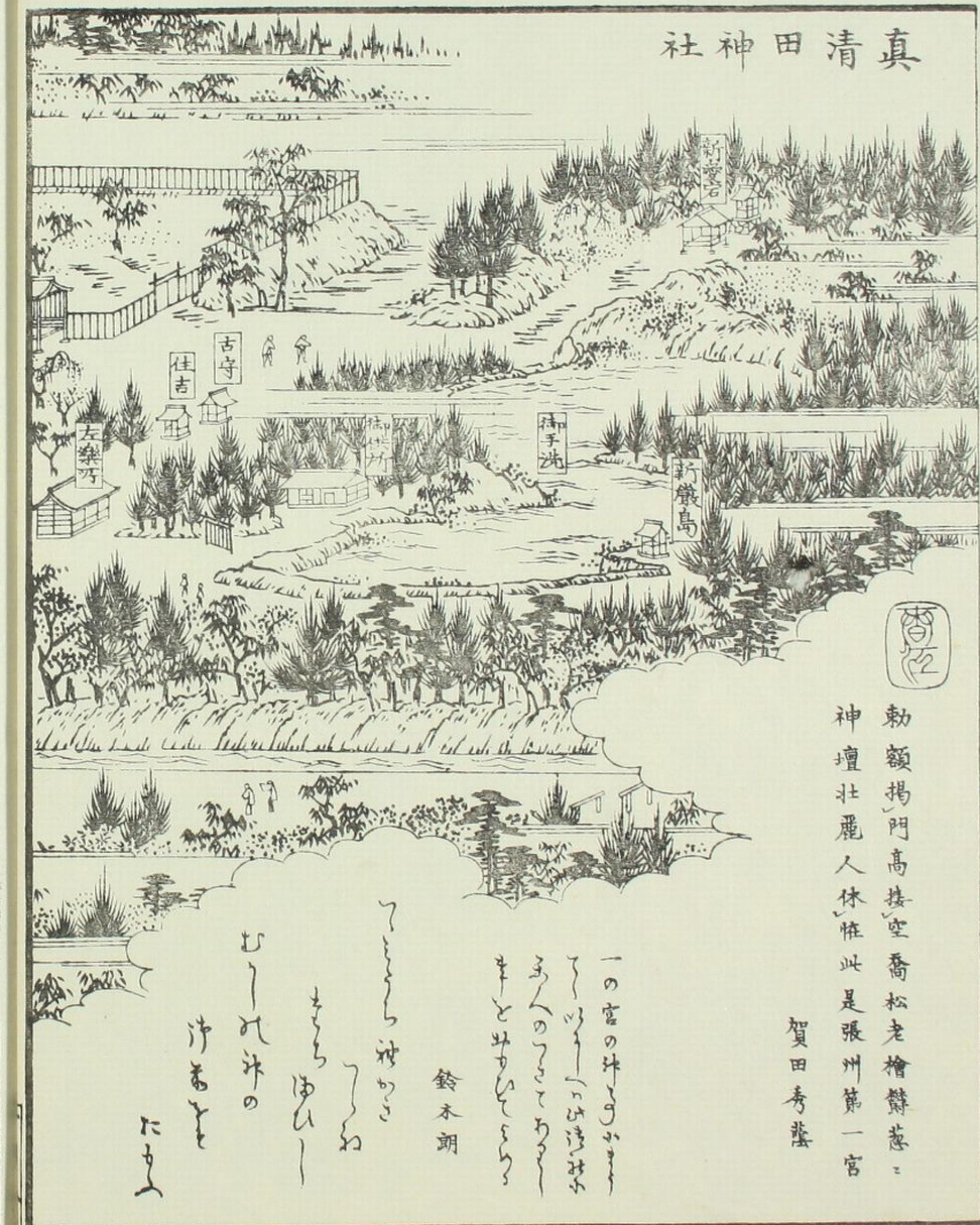
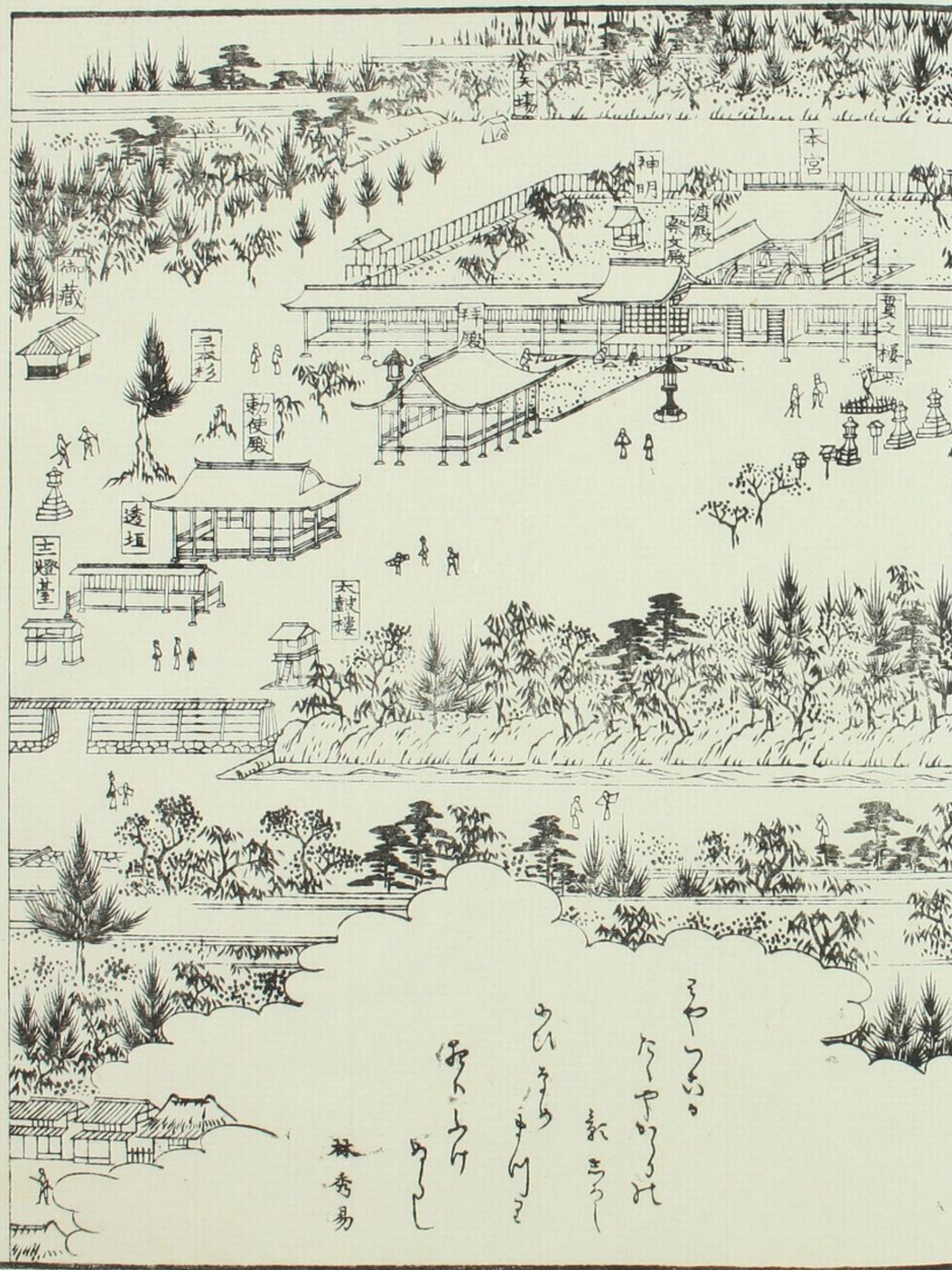
中島郡上

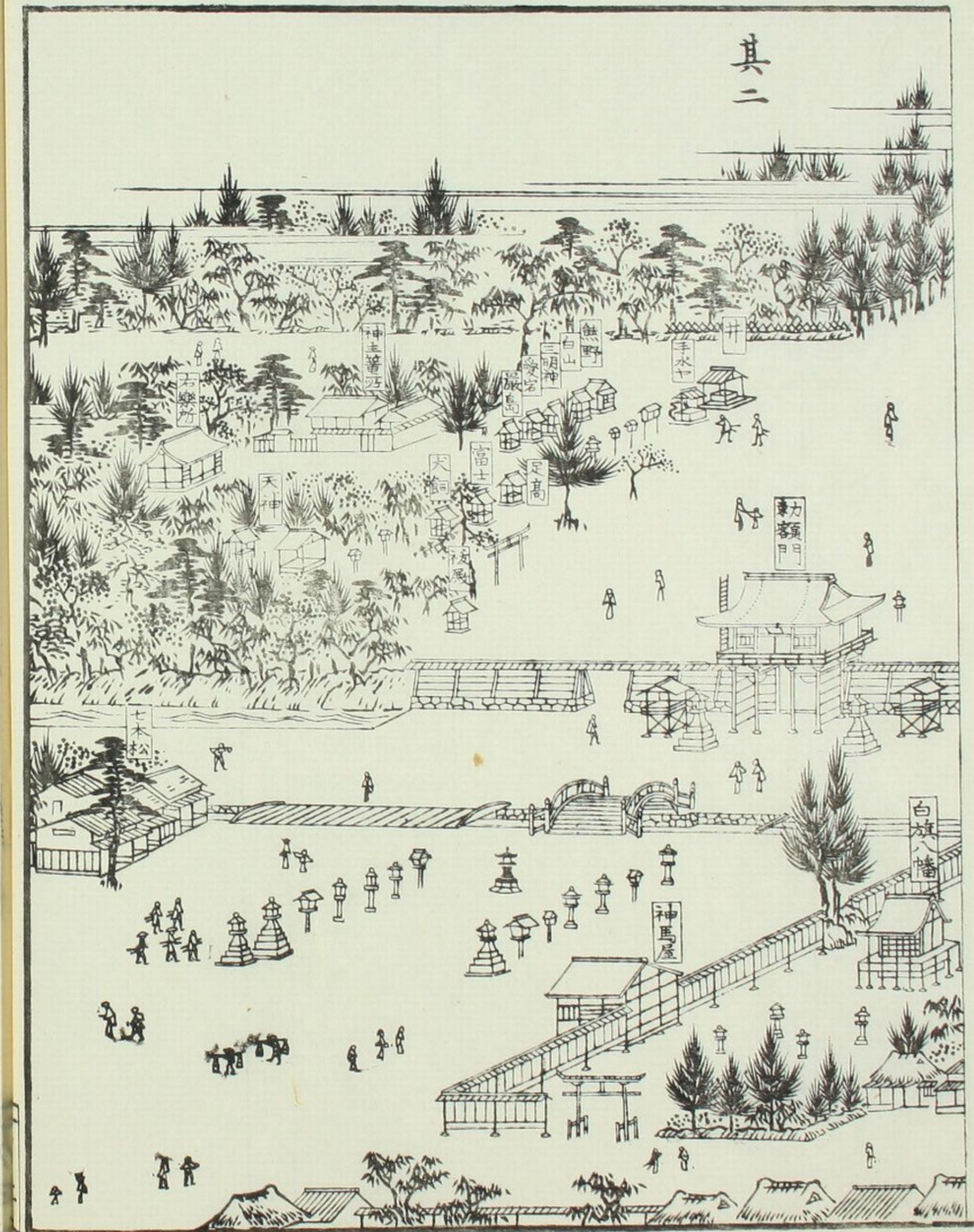
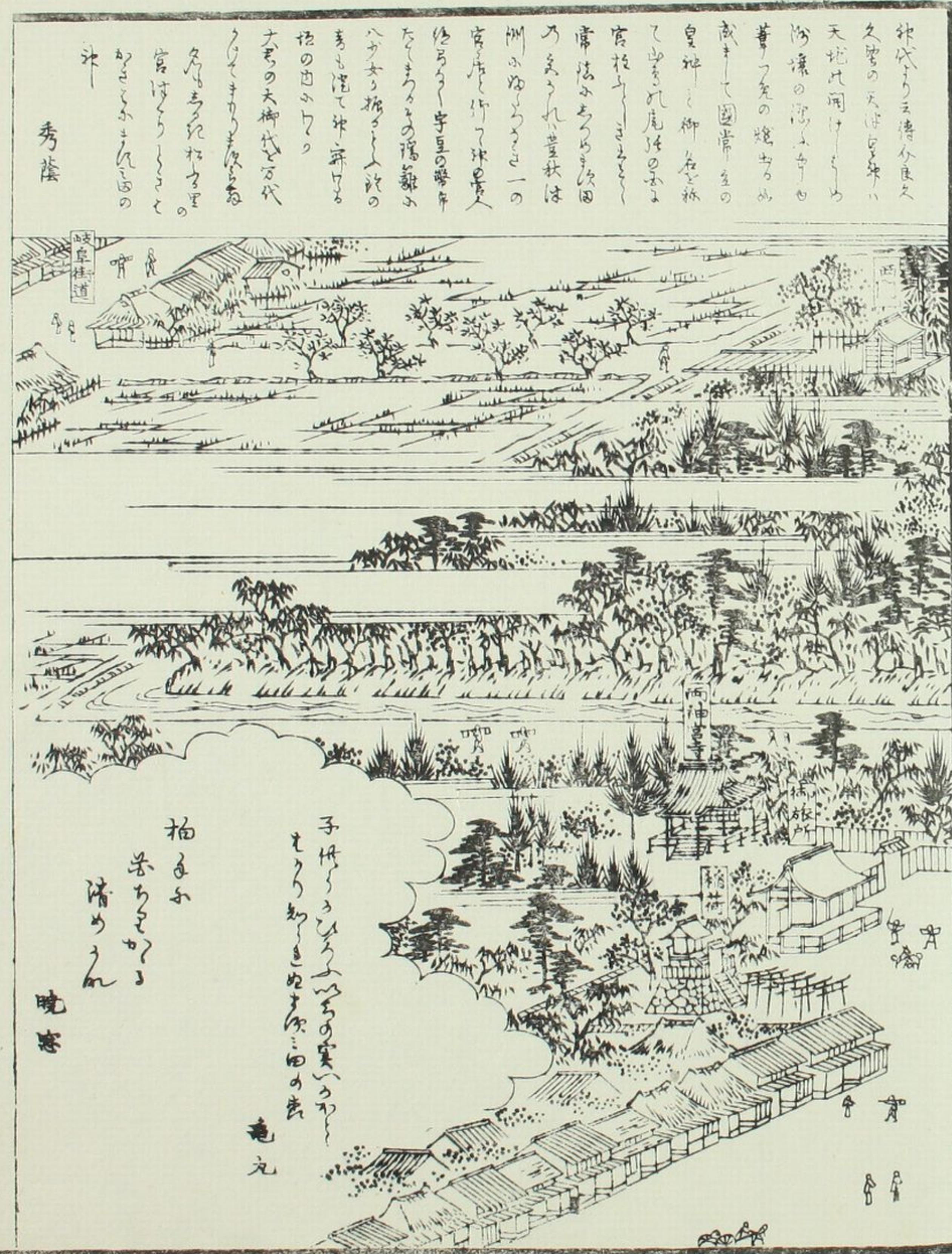
- 中島郡解  
末社  
馬の頭の図  
神宮寺  
常念寺  
濱神明社  
綿曳轆轤  
新神戸村  
彼岸縄手地藏  
足利義教公詠  
野府古城  
御裳天神社  
西方寺  
義教公詠哥の松  
金剛寺
- 一宮村  
神宝井図  
桃花會の図  
社僧福壽院  
火除櫻  
閔氏城跡  
神戸村  
酒見神社  
富士塚  
神明社  
三明神社  
了泉寺
- 真清田神社  
阿佛尼泰詣の図  
社領  
神主  
地藏寺  
御旗竿  
牛野  
孝子孝女  
神戸氏宅址  
天道社
- 市立の図  
別宮  
天道社  
孝子孝女  
神戸氏宅址  
正念寺



淺井田宮丸城跡  
孝貞女三輪の傳  
妙興寺  
砥塚  
陸田御厨  
下津里  
正明寺  
草部御厨  
千町田面  
瓦堂廢跡  
四ツ屋  
長束正家宅址  
萬德寺  
飯尾氏城跡  
淺野長勝屋敷跡  
加藤光泰舊宅  
六角堂長光寺  
安樂寺

國照寺  
宮地花池村  
同靈室弘通の岡  
万里和尚の古事  
大神社  
赤池里  
佛德雷と避一圖  
鐵田敏廣城址  
蓮花池跡  
小栗海道  
拜師舊鄉  
毛受村猿曳  
姉安賀惣園





中嶋郡

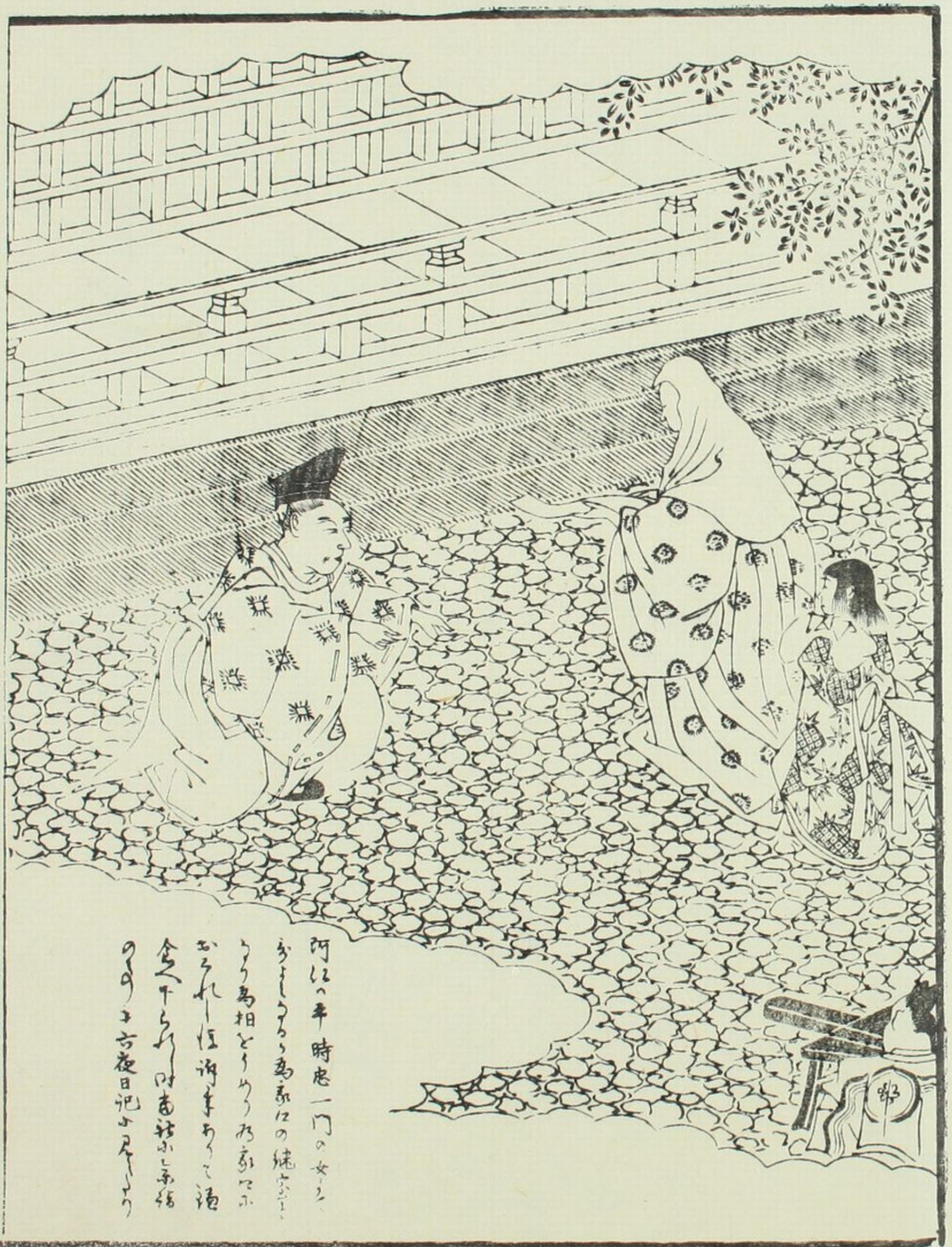
當郡ハ國のうちの酉戌の方にありて國史とより和名抄延喜式等の古書ども小これ中島とかり東ハ丹羽春日井の二郡ト隣ニ南ハ海東海西の両郡ト接テ西ハ木曾川と限り北ハ桑栗郡と堺ト次郡中山かく田園のもの地なり尾張風土記残缺小中島郡民用富貴也材用不少出脩竹柴胡大根胡麻等云々と見ゆるびり黒保川尾張美濃の国界と天正十二年秀吉公木曾川と堺を改められとばとの今よりは小慶うりあ郡中島宮の古縁起小じり倭姫命八節の竹杖と四ツ小折て四方小投といふハウの竿竹と生じりと御園とソい其四隅のうちと中國と呼び是中島の郡名の起りるやうと記さうと風土記などの古説がある傳へりれどわやとぞ矣。

一之宮村

あ郡のうち東北の御里也當國一宮大神の鎮坐す地を以て名づくあ村及び毎ち村寺鳥羽天皇第三の皇女暉子内親王のうちに八條院

沙汰真清田莊尾八條院御領右莊園任本所之沙汰彼家如元為有知行勤狀如件壽永三年四月六日と云ふ又一の宮と云ふ事も古く同書小義久三年六月五日戊午辰刻閏東兩將着了尾張國一宮邊合戰間事有評儀自此所相分方々道云々とく義久記の同時合戦の条十六夜日記康富記等の古書どもに云か一の宮とありて古き地名也

正一位真墨田神社一宮村小字をもつて小の宮と称す延喜神名式小中島郡真墨田神社名神トあり武印行本に本國帳小正一位真墨田大名神トあり夫南社の鎮坐ハ年歴久遠とて洋々と云ひ社説云神武天皇三十三年癸巳三月三日松降莊青桃丘今の一の小御鎮坐うりと之卫折は御神ハ天神七代の下り百王太祖の國常立尊として坐モ尊神常に天地の中小獨立て万物と化育すふたり天御中王尊とも称奉りて天地の主也と云ふ此御神の美德小成



阿はへ平時處一門の女  
かくもうらう為ゑはの徳ふ  
うあ相どりうるみ引て  
ひそれへば詠まぢて説  
かくもう時あ秋かしと秋  
のうす方夜日記す月を



阿佛尼一宮の詣で  
和歌と奉も圖

雅

あくへたすれば 往昔御鎮坐のそとより 荘麗なる宮殿大小の  
神祠常磐堅磐小弥榮え神門名居にゆるまゝ老杉古松の中に  
巍然として立せり故か延喜式にも名神大社の列ふるゝと  
あ國の大社五所のうち第一の宮なる事分明にて 神徳の  
りど仰ぐかもぞあきりうり

日本後紀云承和十四年十一月癸酉奉<sub>レ</sub>授尾張國无位真清田天神<sub>ニ</sub>徒  
五位下 文德實錄云仁壽元年十一月辛巳詔以尾張國真清田神<sub>ニ</sub>列於官社 同  
三年五月辛亥尾張國徒五位上真清田神<sub>ニ</sub>授<sub>レ</sub>徒四位下  
三代實錄云貞觀七年七月廿六日乙巳授<sub>レ</sub>尾張國徒四位上真清田神<sub>ニ</sub>正  
四位上

某<sub>ニ</sub>うふんも<sub>ニ</sub>御事ありて因もつて一於<sub>ニ</sub>うりうり<sub>ニ</sub>よ  
家集<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>の男<sub>ニ</sub>移<sub>ニ</sub>移<sub>ニ</sub>もみの因<sub>ニ</sub>とつくりあひて御事<sub>ニ</sub>ゆくも  
かへりのう因<sub>ニ</sub>あつくりとまも  
今<sub>ニ</sub>素<sub>ニ</sub>に真墨田とまほ<sub>ニ</sub>あるハ武藏の隅田川とまほの門とまほ小国ト<sub>ニ</sub>ん  
大夜日記<sub>ニ</sub>一のふと<sub>ニ</sub>社とまほ

いわばやなまくらうり<sub>ニ</sub>ゆくまくらうり<sub>ニ</sub>おほきうり<sub>ニ</sub>一 阿佛

本社<sub>ニ</sub>祭神<sub>ニ</sub>ト部兼惠の大日本國一官記云真墨田神社ハ真清田大明神是也<sub>ニ</sub>大己貴命尾  
張國中島郡<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>社説<sub>ニ</sub>ハ國常立尊天照大神<sub>ニ</sub>月讀尊大己貴命大龍神<sub>ニ</sub>

合<sub>ニ</sub>あるとりうきねも神祇宝典<sub>ニ</sub>國常立尊也當社祭三神所謂天神七座地神五座也  
とかく合殿<sub>ニ</sub>と御の名を付<sub>ニ</sub>まへ<sub>ニ</sub>真清田清圓<sub>ニ</sub>探桃集<sub>ニ</sub>尊神鎮座之時乘<sub>ニ</sub>八頭八尾大童<sub>ニ</sub>  
又<sub>ニ</sub>合殿<sub>ニ</sub>大童神とある事<sub>ニ</sub>と申すに在り<sub>ニ</sub>又僧惟高<sub>ニ</sub>附<sub>ニ</sub>雲日件錄<sub>ニ</sub>も嗟哉天皇  
の御宇弘法大師<sub>ニ</sub>と童神小祈<sub>ニ</sub>と被童神尾張國真清田宮森木中<sub>ニ</sub>房<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>乞<sub>ニ</sub>て  
ひ宮に龜<sub>ニ</sub>來<sub>ニ</sub>弘法曾<sub>ニ</sub>小<sub>ニ</sub>おそ<sub>ニ</sub>松<sub>ニ</sub>と行<sub>ニ</sub> 渡殿祭文殿廻廊瑞籬日之門  
月之門拜殿勅使殿宝藏左右樂所御饌殿齋館透垣西門神馬  
厩御旅所一之鳥居樓門<sub>ニ</sub>南面小<sub>ニ</sub>閣上<sub>ニ</sub>扁額真清田大神<sub>ニ</sub>探桃集<sub>ニ</sub>伏  
境內末社熊野社白山社愛宕社三明神社嚴島社愛鷹社淺間社  
富士社天神社八百萬神社<sub>ニ</sub>共小本社の南<sub>ニ</sub>子守社住吉社新嚴島社  
新愛宕社<sub>ニ</sub>共に本社の東<sub>ニ</sub>白旗八幡社<sub>ニ</sub>櫛門の外の本丸小<sub>ニ</sub>伊豫守源賴義朝臣陸奥  
勝利を得<sub>ニ</sub>とけとばゆ落の際は八幡社と勅清りて白旗と村<sub>ニ</sub>の川<sub>ニ</sub>浅<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>納<sub>ニ</sub>  
かくうかく里人白幡の社もよりより川と磯川と<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>がほせりやまとて川と<sub>ニ</sub>の  
亦末社殿宇四境の神門多居多<sub>ニ</sub>びとく廢<sub>ニ</sub>とくとく<sub>ニ</sub>ハ享  
禄の<sub>ニ</sub>の古圖に備<sub>ニ</sub>うだと見<sub>ニ</sub>うべ

御鎮座松古樹<sub>ニ</sub>枯槁<sub>ニ</sub>貫之櫻<sub>ニ</sub>も今<sub>ニ</sub>極<sub>ニ</sub>繼<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>枝<sub>ニ</sub>紅葉<sub>ニ</sub>勅使<sub>ニ</sub>  
う<sub>ニ</sub>和<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>海<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>納<sub>ニ</sub>年<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>の<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>と樹<sub>ニ</sub>一年庭田大納主重嗣卿<sub>ニ</sub>十<sub>ニ</sub>  
う<sub>ニ</sub>と氣<sub>ニ</sub>ひ<sub>ニ</sub>ま<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>つ<sub>ニ</sub>ま<sub>ニ</sub>い<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>ぞ<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>か<sub>ニ</sub> 乃是<sub>ニ</sub>作<sub>ニ</sub>の宮居<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>の事<sub>ニ</sub>か<sub>ニ</sub>紀<sub>ニ</sub>くのと

聖武天皇宸翰古額

真清田大神

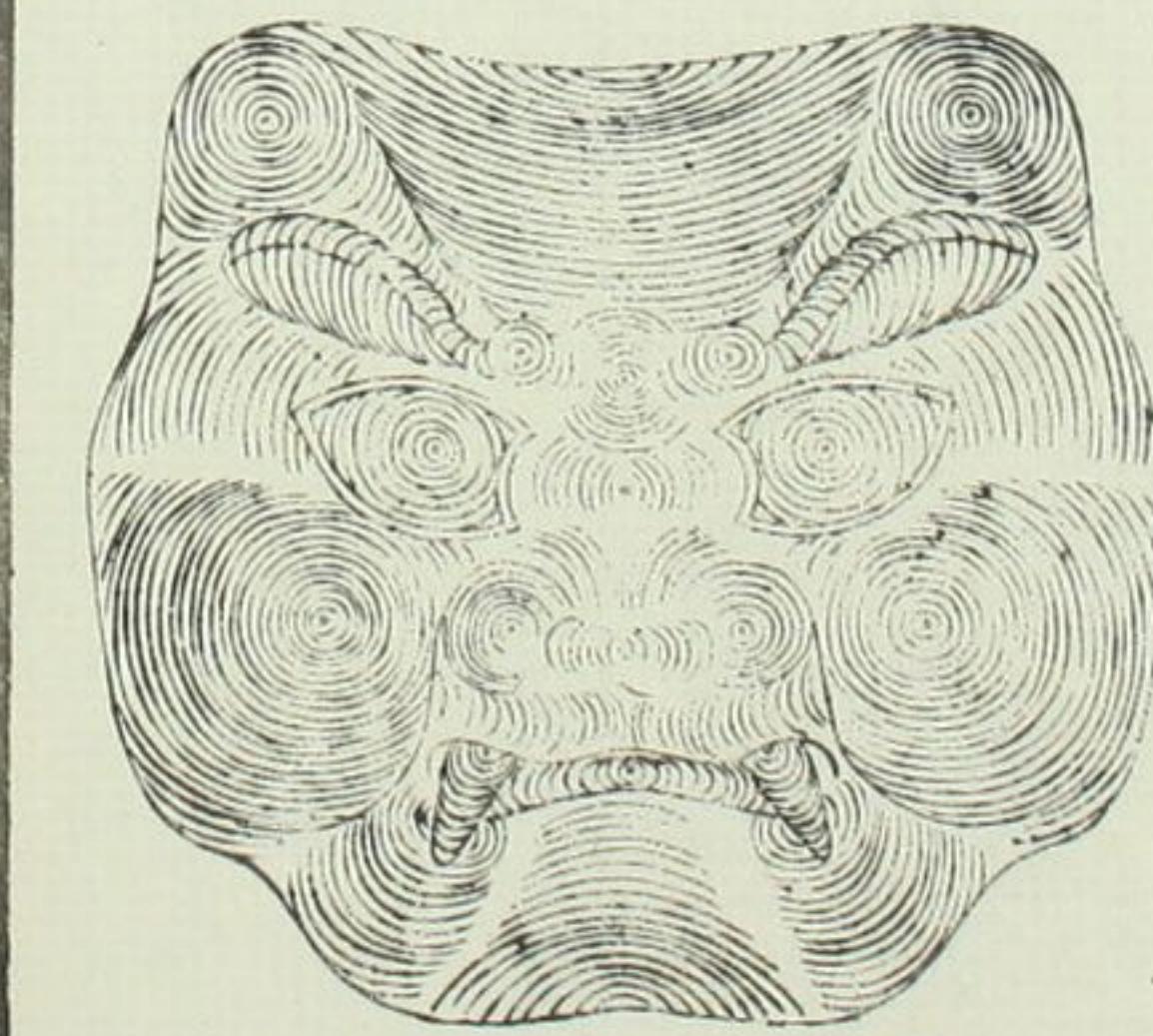
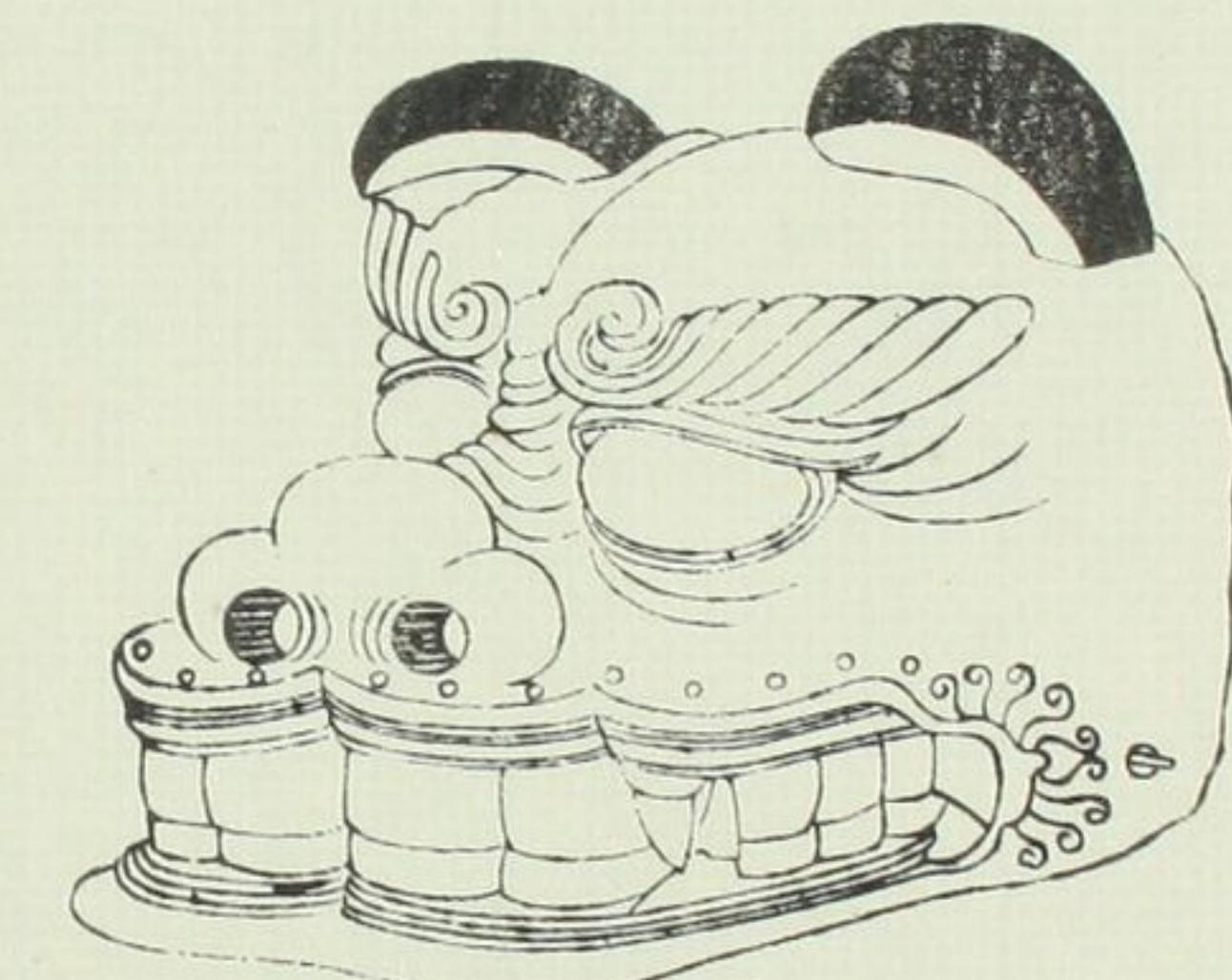
木目の假面



神寶

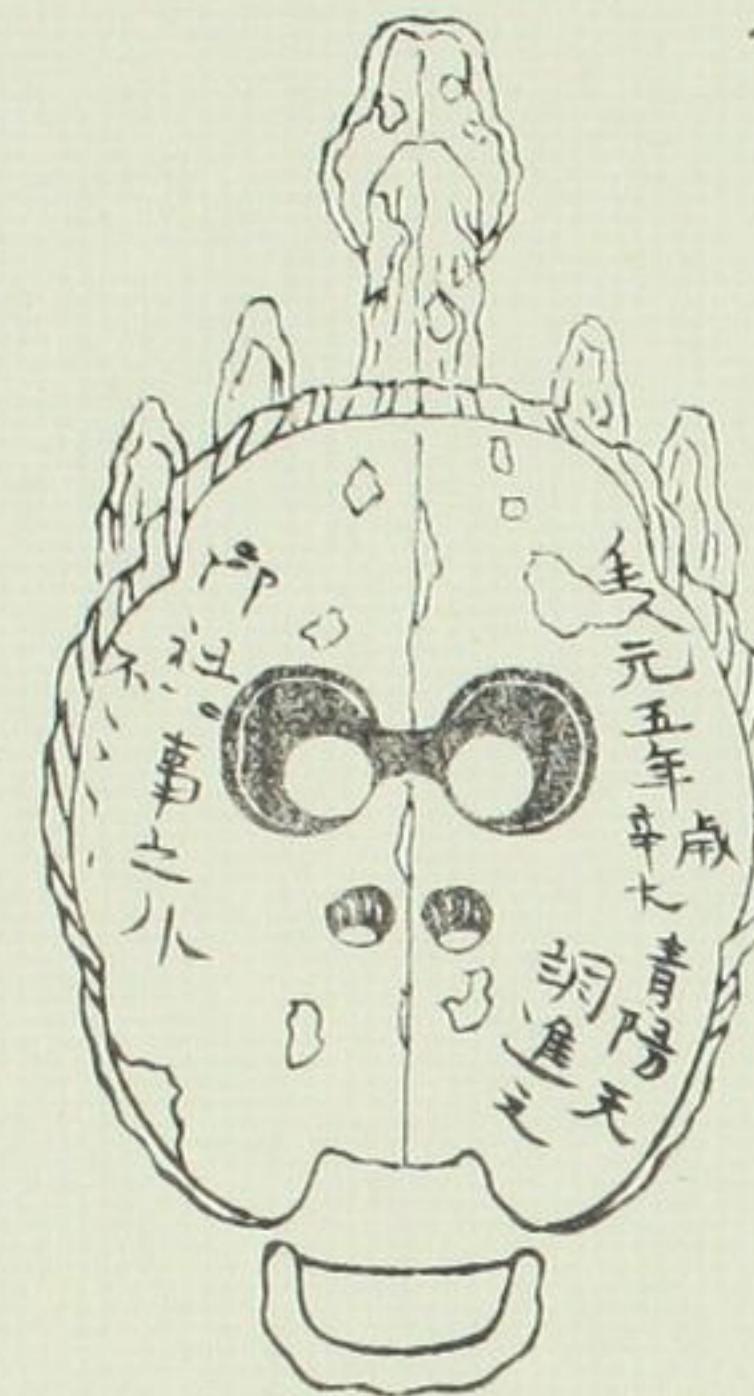
裏書

頬主一宮住人藤原朝臣  
四郎右衛門尉清則  
作者神官坂上宗則  
画圖之師源朝臣長氏  
于時文明三年  
九月廿四日



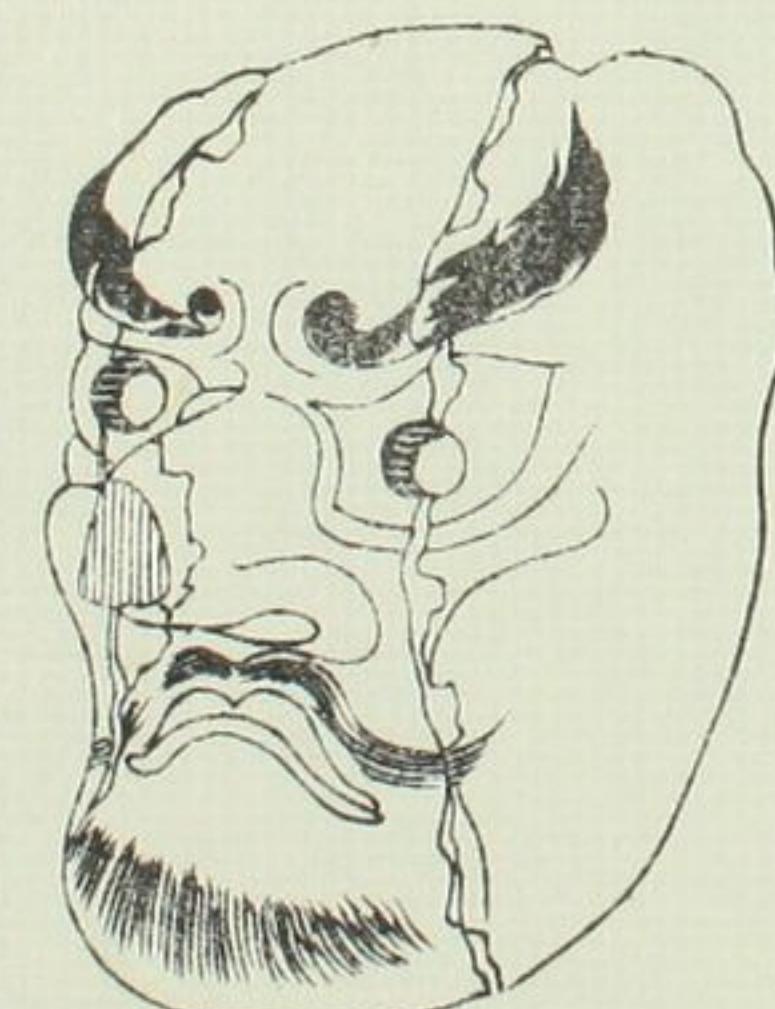
陵王

集書  
承元五年歲辛未青陽天謂追之  
御社神事之外不可出他所



貴德

承元五年



散手



童舞

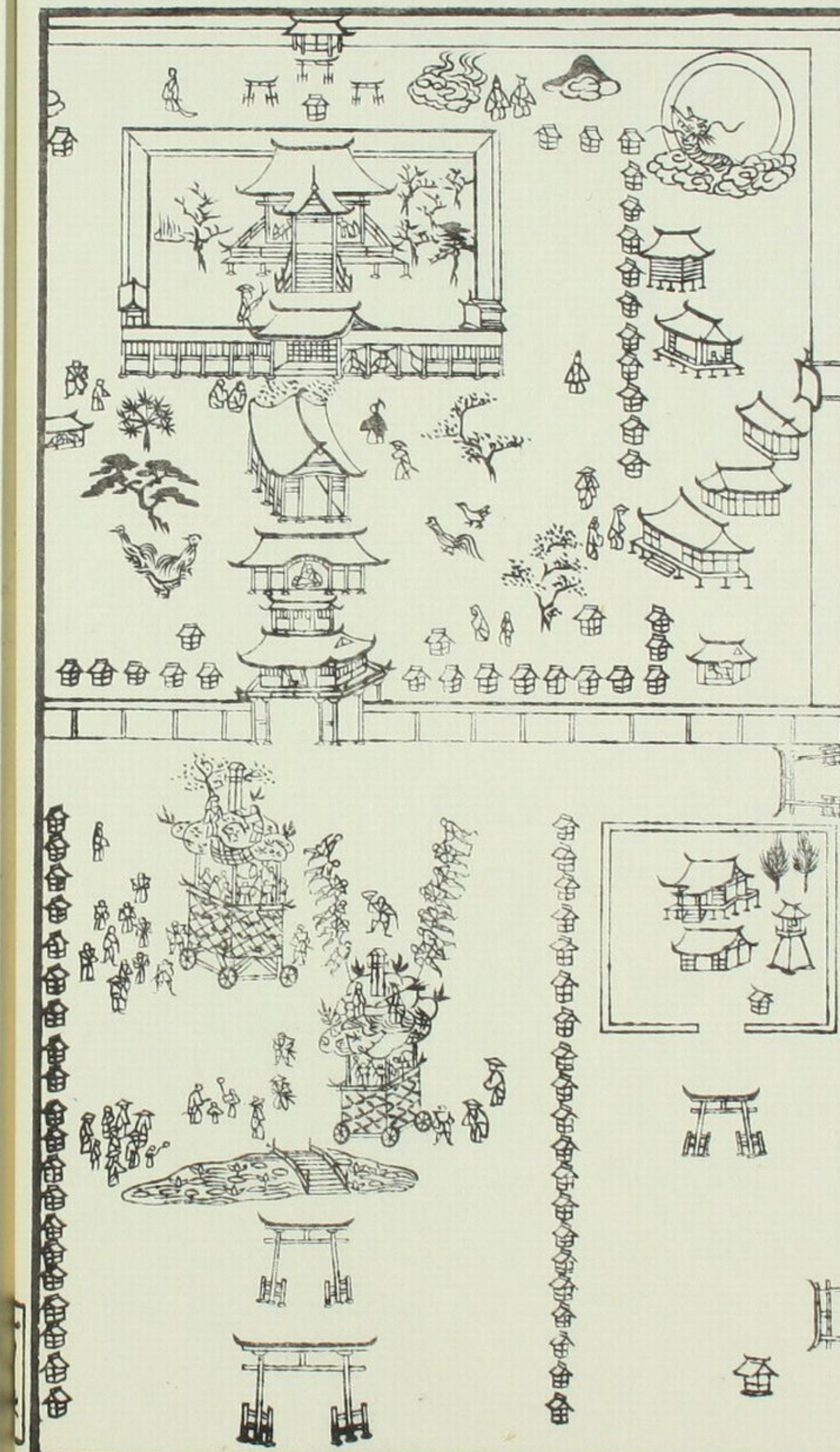
承元五年



高宮の舞あやかしはまちうら中世魔羅の形のあやかしむけの性面  
奉せのあやかし侍り今其一二と國々の面をもて  
其餘も建磨後治文多の年多きよとく

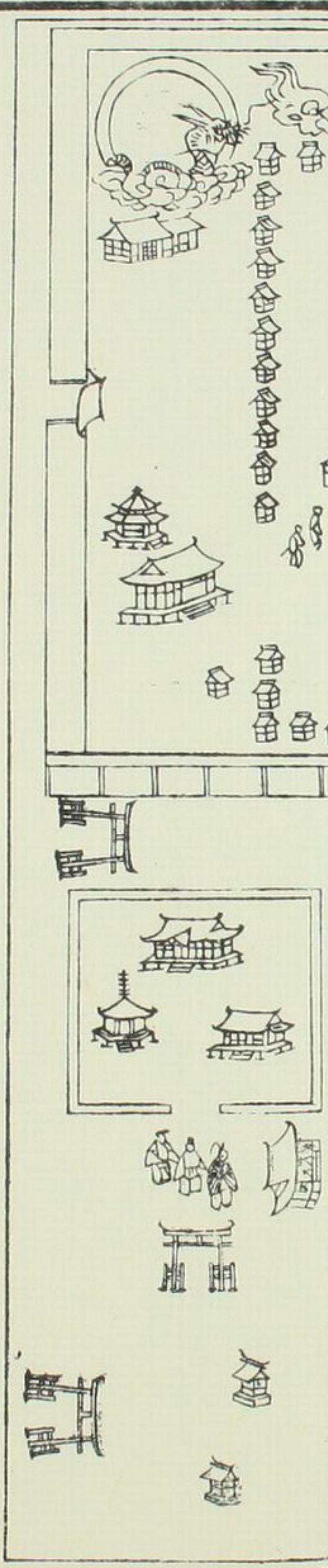
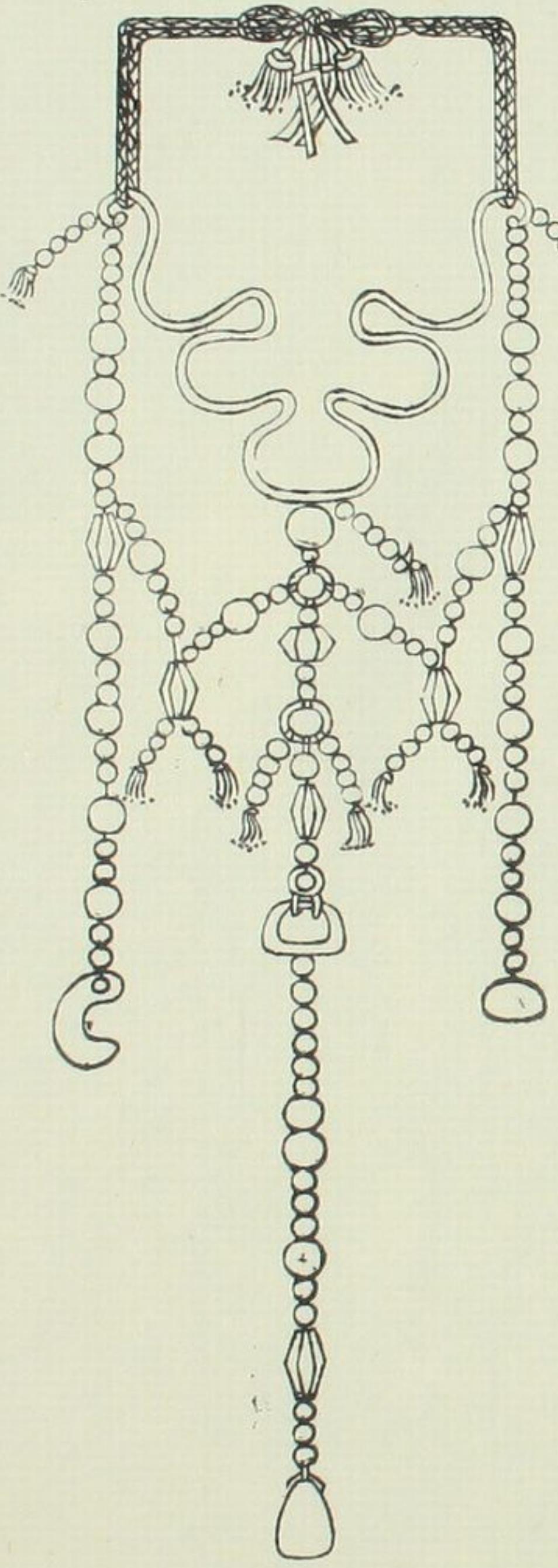
高宮の舞あやかしはまちうら中世魔羅の形のあやかしむけの性面  
奉せのあやかし侍り今其一二と國々の面をもて  
其餘も建磨後治文多の年多きよとく

一、宮古圖



卷之二

五百箇御統



てある。さうの上より時代と併せてものと神との名をあらわすものとある。延暦年三本

二本ハ枯て弘仁年七本松六本枯て今二股竹陵内小

神寶五百箇御統和琴古鈴

銘小鉢に附り一尺二寸廻リ銘小

獅子頭銘文

委ノ木六隻

鐵鳥居

本社の内陣にあり高一尺五寸其のうちすがれて御韓櫛四合

木畳也古雅として甚多く長禄天正二年甲戌八月

元年の後も古雅として甚多く長禄天正二年甲戌八月

銅盤

十八日の後も古雅として甚多く長禄天正二年甲戌八月

松竹梅巴等

何よりも古雅として甚多く長禄天正二年甲戌八月

ソウシテ享徳二年文明十二年の後も古雅として甚多く長禄天正二年甲戌八月

太刀

二尺八寸三條

正宗等の法あり

短刀數口

來國俊來國光表國次

多一喬刀

兼信作

鎌箭

一手

銘小奉納八幡大菩薩御宝殿永正七年庚午三

假面二十三種

出他所集元五年歲次辛未青陽天調進之

寛永年中

國祖君の面と云ふ是も絶世の宝器なり

陵王の面の名の御社神事之外不可

人常に褒美されど此面にもうかと曰日の御

吉隆秋等數通有りて傳村所無く所存す

古縁起二卷

正徹の筆をあつて祕書

燈臺銘

集古十種小出

探桃集小出

足利義植公花押

の制札とぞり

神君國君の御制札數多あり

社領

御朱印三百三十三石六斗餘是を及び享水年間

御事附之今の御領

御朱印三百三十三石六斗餘是を及び享水年間

御事附之今の御領

御朱印三百三十三石六斗餘是を及び享水年間

御事附之今の御領

例祭御鏡餅御饌調進

正月白馬神事

同七日供御調進神馬と幸

小豆粥

調進

正月白馬神事

同七日供御調進神馬と幸

小豆粥

（三日の朝）

供御と微す

祈年祭宴

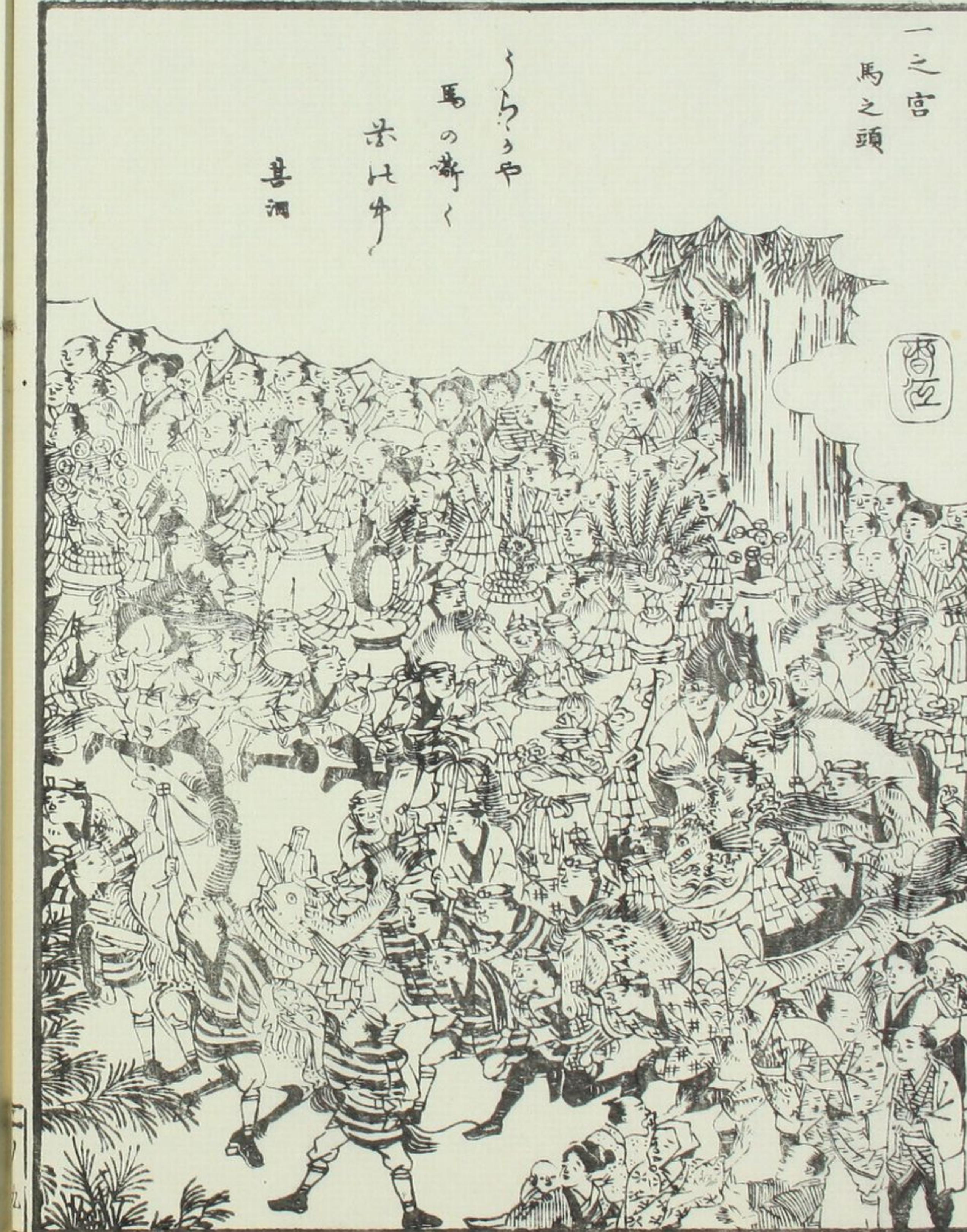
正月朔日御饌殿と御饌殿と御饌殿と御饌殿

（三日の朝）

供御と微す

桃花會

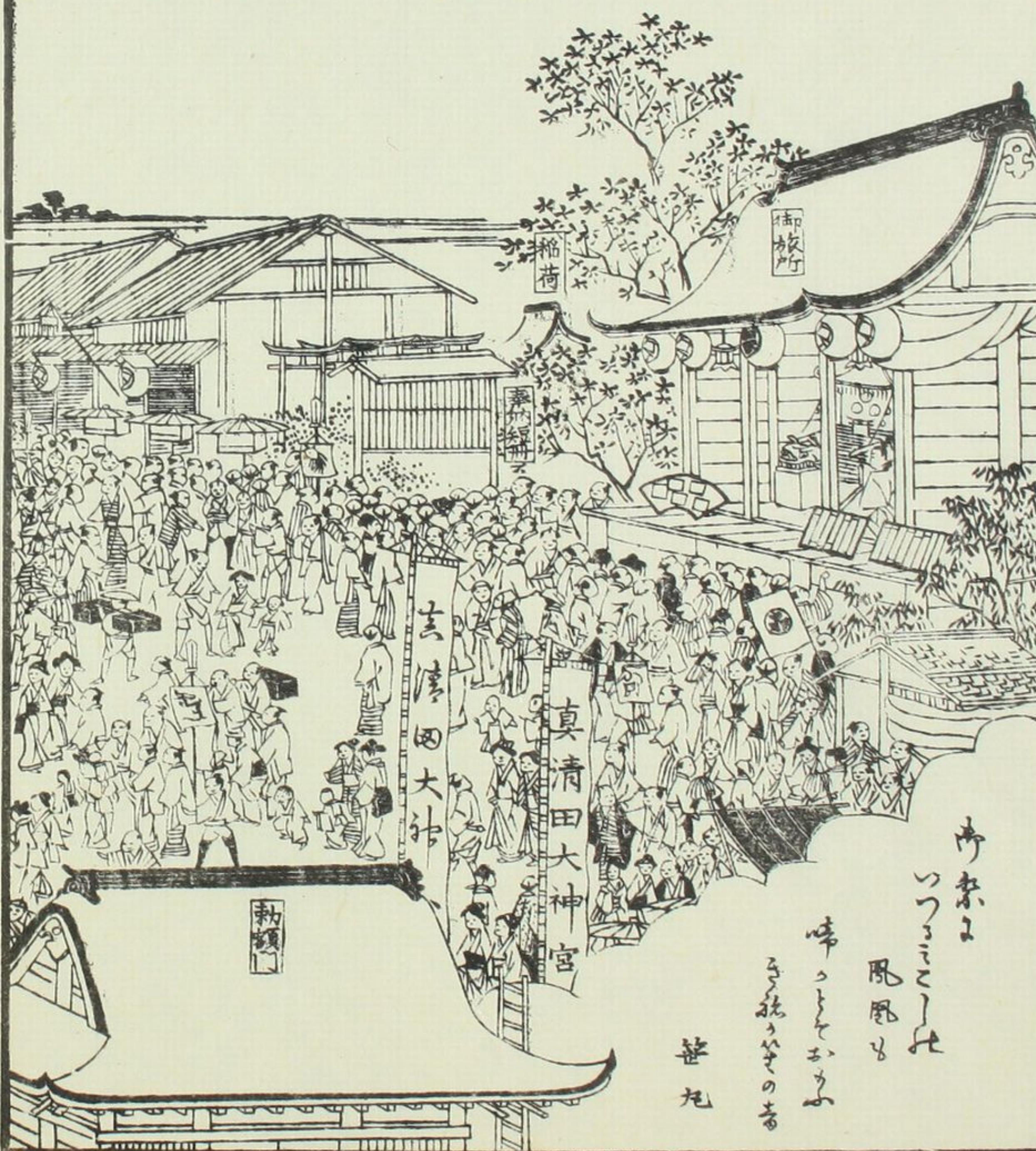
正月朔日御饌殿と御饌殿と御饌殿と御饌殿



### 桃花會

結構行宮十  
二櫛神輿降  
自五雲端平  
欽雅頌標明  
德闔國人民  
拜王鑾斜歷  
曉階旗影轉  
剏修春祭馬  
聲闢彩毫新  
有君王陽仲看  
禮文勝舊觀

森正有



序章

風風也

啼うとてかふ  
みのやう等の音

並丸



齊臣

之五年の事も既に神のありはすは清田かたる御の祀令

從一位重嗣卿

からふるるを仰慕すもまことに世化のやうのきの神事

藤谷為脩卿

松はくのまのちハ三重とし神のまゝにまつまつ

外山光施卿

もれりかといある神事とじくの宮よりれけ

山本正邦

計りのめひとのよひとまほひアシトモレの嘆春

中尾義稻

八十八夜祭

三月四月のうち 端午祭

五月五日 鹿角調進 六月稲て走をまき 無病の實妙麻

數と神物と清薦

荔の聯とからせん御

大祝ヲ祝持祝三人大祝と小祝小薦よりの神事とよ

七夕祭

七月七日 素麿

大宮内

陣掃除

同日 内陣の幣

船とくろ

神宝虫拂

同日 重陽祭

九月九日 慶餅

馬

二十足と二ヶ所と奔走の

大と神樂

同日 新嘗會

十月晦日より十一月三日 神酒白菊調進

大

行年祭小同ト新嘗宴

御神樂

同日 有拍子和琴と笛と吹る到りとくら多御行

追儻

節分の夜を

御注

小同ト

御神樂

易拍子和琴と笛と吹る到りとくら多御行

連曳

十一月

臨時舞樂

遷宮の時 東照宮の伶人各向て舞樂と奏ひ

桂大津田社

外社吉祥祭種々童祭とトリ

五十足の神事と行者十人

其不小松

御止宿又御旗竹と歎す夫

國君岐阜行將より

神官三行宮司一權官

五十五人

中

鷹

内人十五員内

樂所負

神樂所

五員内

巫子座四

修理職四

樂

座十五

流鏑馬司負鍛冶

下司七員合計七十三家

佐多氏神戸氏林氏森

相村氏伊藤氏淺野氏松本氏片山氏原田氏

足利氏足主氏

五十足の神事と行者十人

其不小松

代

英子年三十

開

田新川

雕

堯反宇聾一晴空

壯麗人称第一

官靈碑

元

日祭儀

遙思古時風萬竿修竹當階

綠千樹

天桃夾

路紅邑里

絃歌聲自樂應知父老值年豐

星代弘賢

木全雅直

暖

ものもゆ

内之神の神のうちも木全

木全雅直

や

りくらむて嘗めぬくも木全雅直

僧日潤

葉

のあらりありいき木全雅直

鈴木春蔭

植松茂岳

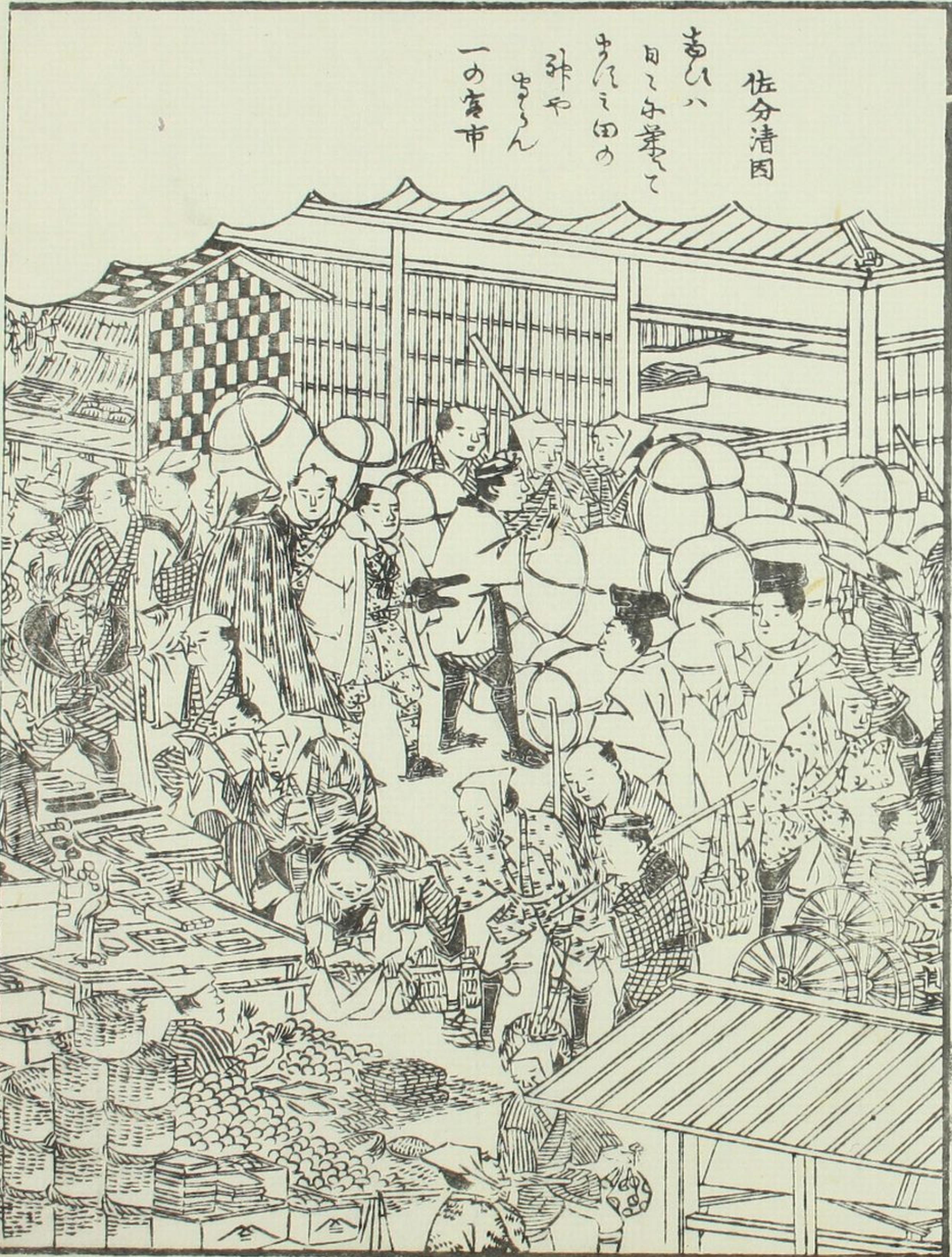
一宮月並市

あ所小毎月  
三八の日市主ら  
よそをきをの高  
人寄集り絹布  
とよ、うきの玉局  
あひ物 雜穀  
わらをも行がう  
す文易さま幸  
跡一数万人の  
沙ふる波南東  
市肆記はく  
臨安府の賑ひ  
りや思ひま  
う

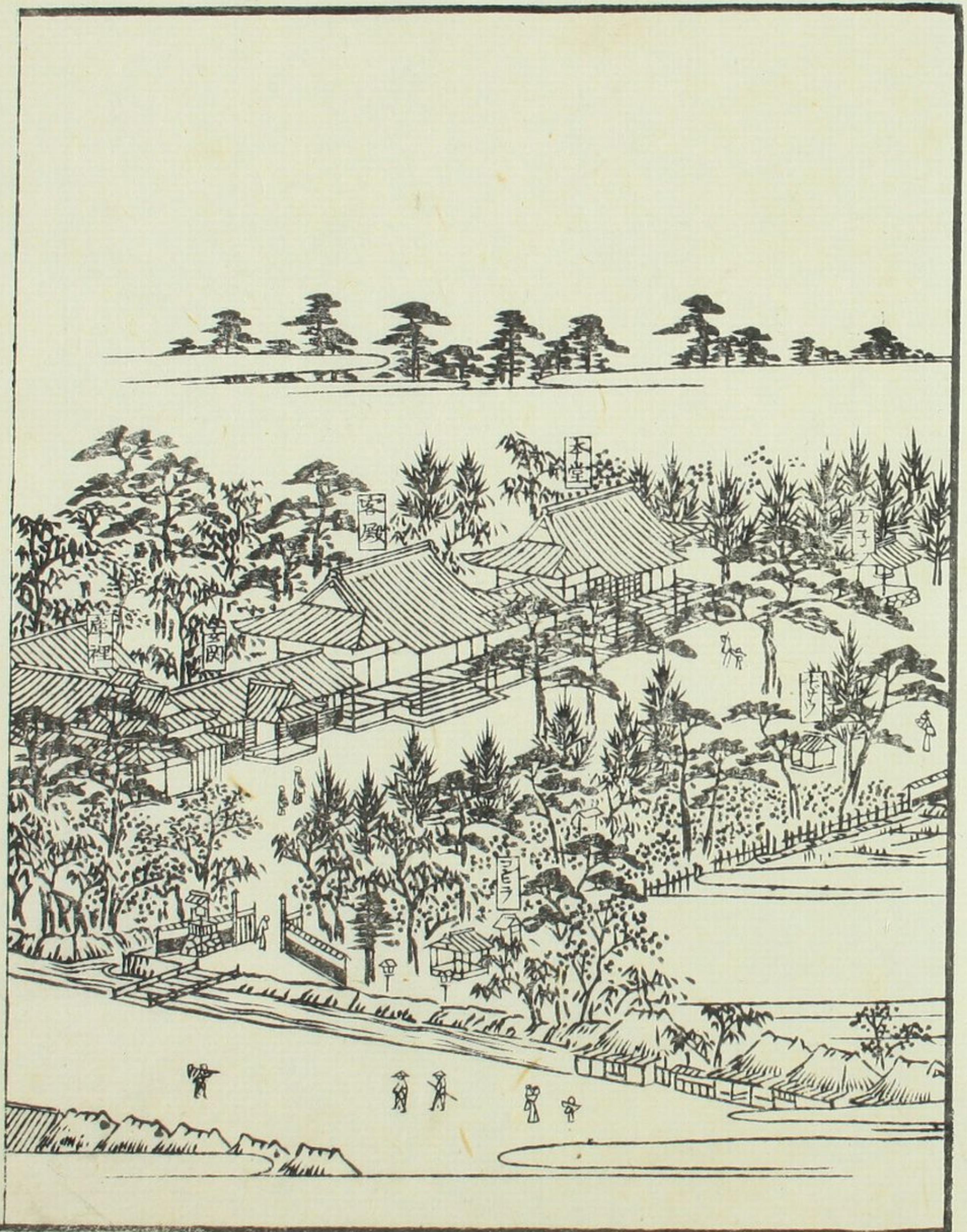
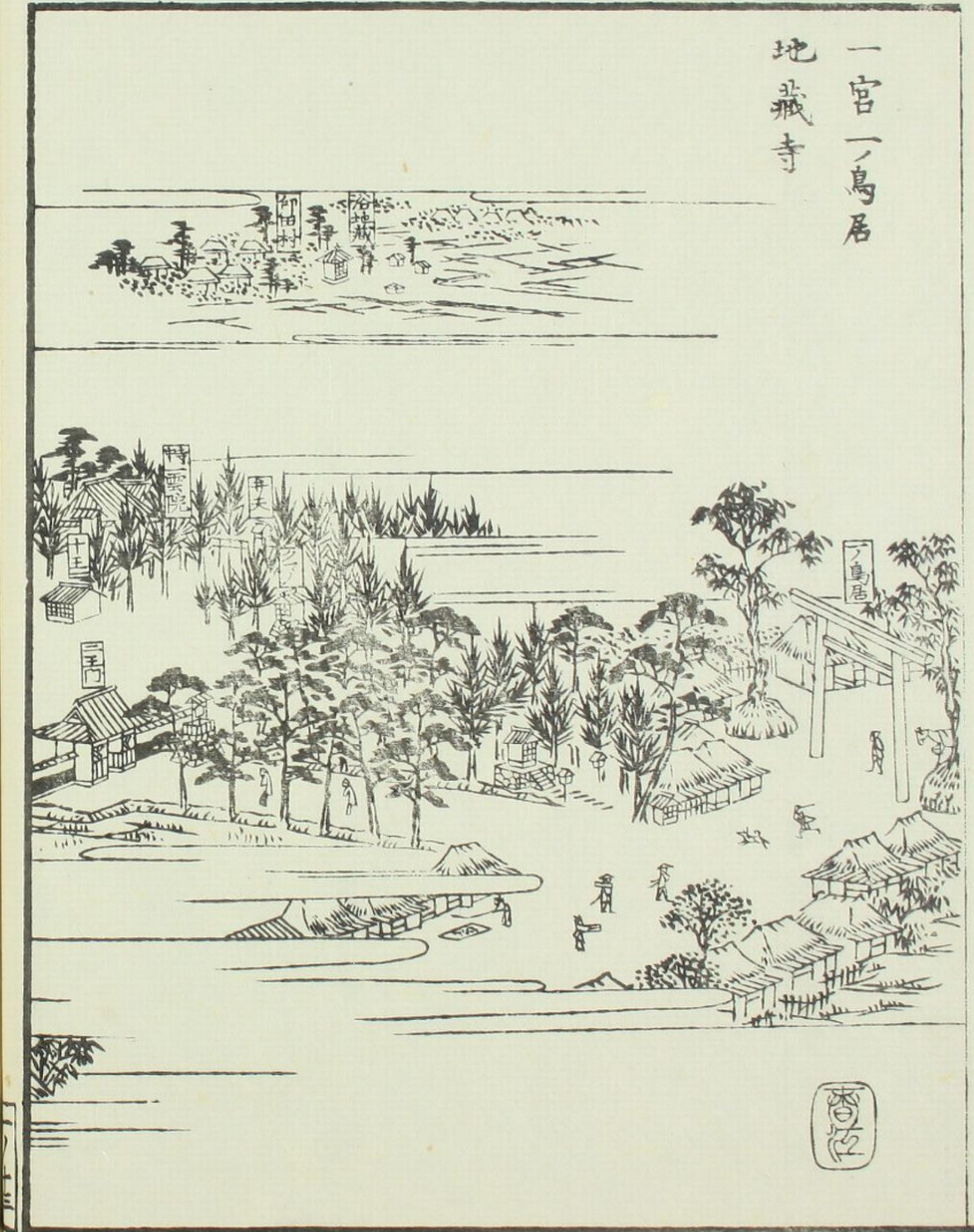


佐分清因

あひハ  
自こ尔差まで  
ナヒミゆ  
ズヤ  
まん  
一の宮市



一宮一鳥居  
地藏寺



別宮

大神神社

花祇天王社

濱神明社

社の東に流り昔ハ此處大して潮満る

大樹

神戸神明社

子守社

神主家及び社中の中の

大國靈社

御供田社

更

屋敷社

齋宮社

貴船社

三ツ石社

熊野社

山子社

淺間社

牛野社

東小島社

西小島社

印田社

白山社

四峯社

兩鄉寺社

境内小連

松尾

社八王子社

八百萬社

天王社

芳原田村の由

宝部山

龍蛇院

地藏寺

因村から真言宗

山城開祖院本

南朝院

龍藏院

良照

薩の開基

魏古刹

中古火災

小やつも

荒

廢

弘長年中空圓法師

無住国師道跡考云師の字と一曰

福壽院

真言宗南村地主未文永年中空圓法師の開基と頃賀崎山勝福寺と号す

上人も母姓梶原氏にて相州の人と其上足空田上人俗門の甥にて本州二宮地藏寺の

開山と申すが開山と云ふは書三人同氏族かと四十一年教小辯うり倒て三人時相會して清波

わく世人乎ど尾州の三田

事起と寛永のモドリ又火災小やく

行基の作

寺傳小ノク○本尊

地藏菩薩の像

上人丸等日房寺

等月上人被請招云彼寺供養之表

白英諷誦事依所望康富草進之

房と号す時本州万德寺中奥常山

上人も母姓梶原氏にて相州の人と其上足空田上人俗門の甥にて本州二宮地藏寺の

開山と申すが開山と云ふは書三人同氏族かと四十一年教小辯うり倒て三人時相會して清波

わく世人乎ど尾州の三田

事起と寛永のモドリ又火災小やく

行基の作

柳星山

常念寺

因村から淨土宗西山派

前龜保村曼陀羅寺末

後小松帝の明徳元庚午年の

草創開山

空選名運上人

時真清田大神小詣

一百日通夜して淨土の教と弘通べき地と授けりと祈願うけ

一百日通夜して淨土の教と弘通べき地と授けりと祈願うけ

小石自滿する光明神告たまく汝仏法真隆の志ちて我小其

地と水を幸殊勝うり則是より東方に向て天地より行て弘教

まべと告うる時小天より星三拂うりとてかくとてかくとてかく

ううの空選感喜の度頻うりて東北の万尋け小少嵩坐にあく

柳の灵木小三尊の餘院新向したまく是明神の示したまく所

く堂塔と建辛本多くありその灵陽とりうる柳星山と号す

かくて星霜と経て嘉慶年中今に地かくつ

西方四十八頭所三番

専阿ガ西方四十八頭

本堂

本多阿弘院主像

所縁起ふ

本堂

服士觀音堂

傳教大師作

と安延次足利

大正三年癸巳八月書寫の古縁起西山國師某

撞樓

近く正徳年中の達

寺宝

大正三年癸巳八月書寫の古縁起西山國師某

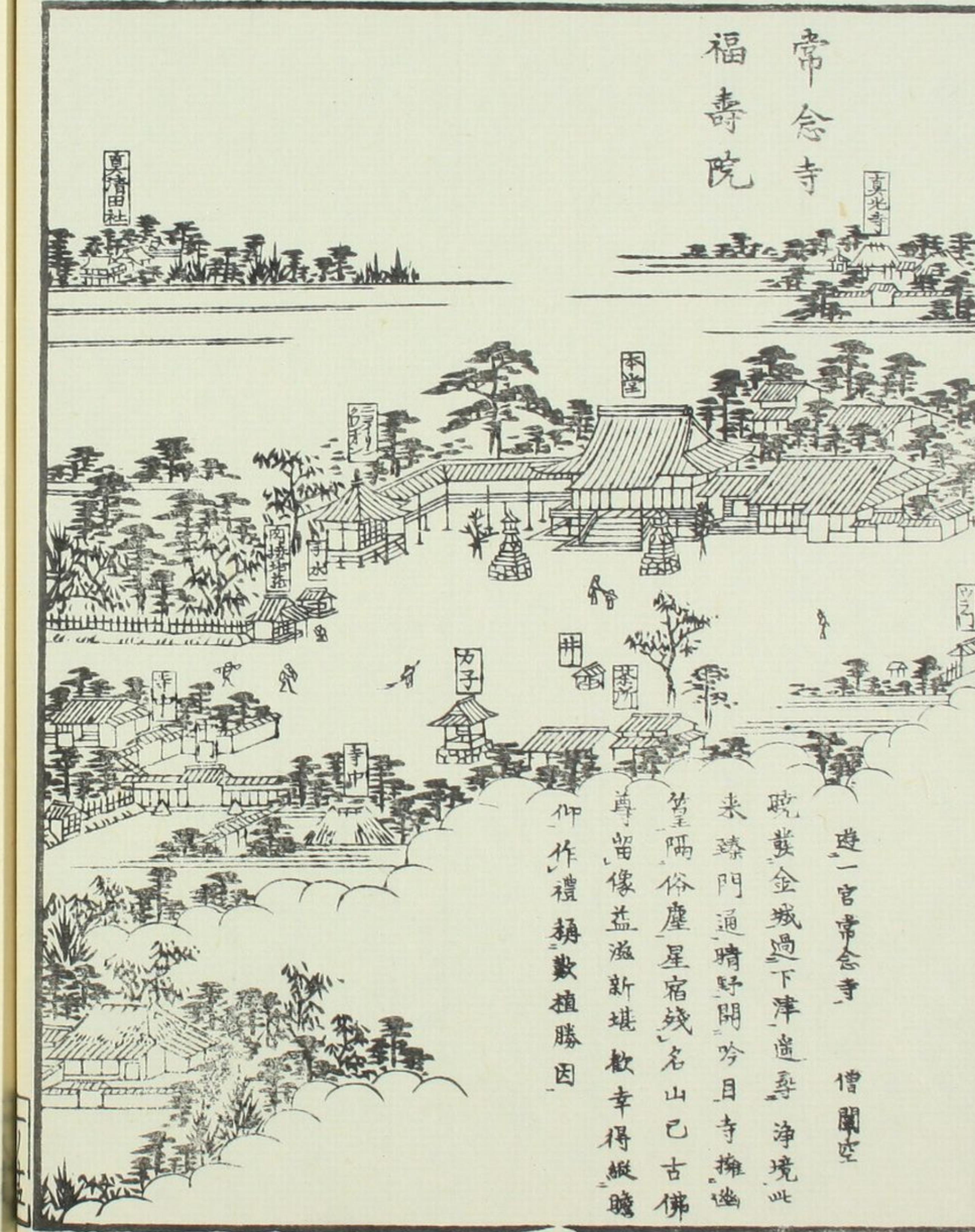
撞樓

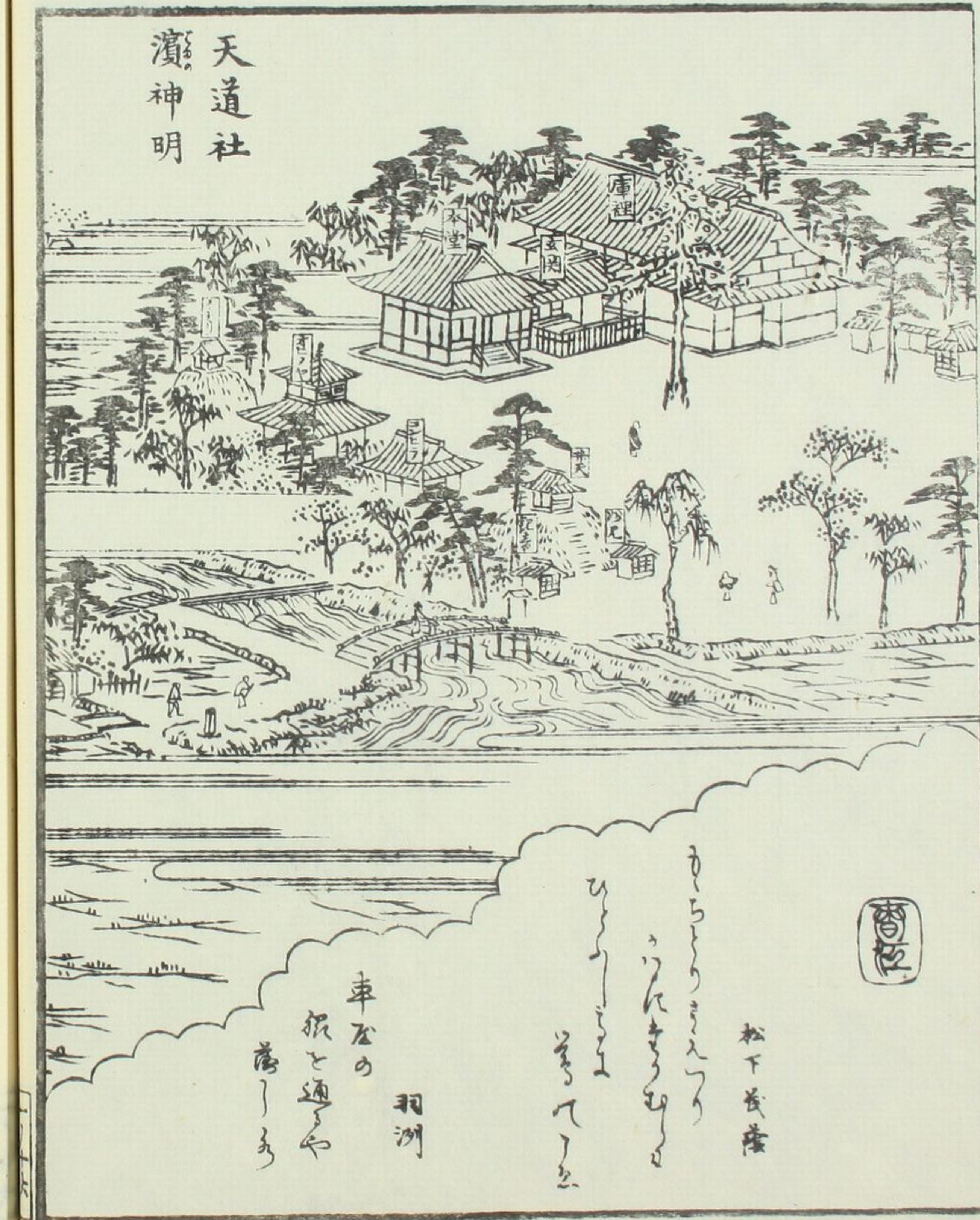
馬津からひきうち

寺宝

の淨土曼陀羅

國祖君御華菴菴の二字





天道社  
日待の圖



是ハム一あちに箋と數多候一トモウード 塔頭 圓向院 尚もハ宗門の准提林  
國君の名を承かねばい御筆とててひそへう 小して國君へ御謁と免き也以證文也とあ。又嵯峨御所より往生要集  
十幅寄附ありて昊室の地一とせり

火除櫻 因村金剛山真光寺の境内のあり天文年中尚も廢失の跡を尋ね樹の梢から下り  
天道社 因村小野ノ社古招魂の社也う」と享保年中安治郡稻本庄新村不<sub>レ</sub>易山天道  
寺と堺郡八事村のくらうに遷ちと改号あり。御天祐のたる大日め集とあす  
ホウア一宮天道と称一八事村も鷹ちの馬革あく次第同堂宇多きうちに河内參天も  
牲ちり落成の社あり。又例年十月十四日おハ毎祭<sub>レ</sub>通夜する者もタケビバもの子と  
フア候と寺へ出候十五日早天おハ日待持とつに供物とさげ  
日のかど遙一誦經一坐る境内ノ所にてミ火と照り人騒

関氏城跡 因村小野ノ東西二十八間南北五十九間四方に亘り。享徳の頃國懸多傳康政トフ人高  
村小野次より關十郎ち法名淨蓮の子園小十郎ち長安等南岸小居て武  
功とあく後信長エ秀吉云の頃の諸軍書に凡く甲陽軍鑑<sub>レ</sub>尾張守人國基立爾其  
一族もそひるの人うり足利歟の被官加納修理進長能<sub>レ</sub>あ村の人うり其居地今ハモ  
ぐ一蟻川親元記。寛正六年九月二日蟻川出雲守申御被官人事  
始也加納修理進長能尾州一官住人守護不入所也ト云々

牛野 因村の支邑も小野の東南の方にあり古の海ひう

今も南所神明社の境内に小栗山の並松<sub>レ</sub>大樹あり

己う色のくろ田ひらくううわくつる牛野につくちゑ

堯孝法印

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

加藤磯足

### 孝子孝女

因村小林莊ノシリテ士りて父母の孝とくうりが後小天明三郎を官府より  
沙若干<sub>レ</sub>賜り又友太郎<sub>レ</sub>しゆも母に孝<sub>レ</sub>うがまひ病ひひづくじくく  
タリシモ沙若千<sub>レ</sub>の侍妻<sub>レ</sub>ハ孝子林莊<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>小冊<sub>レ</sub>洋<sub>レ</sub>とくに略歴家政の頃  
小山所の社事真神田主家母に孝りて官府より白銀若干<sub>レ</sub>賜り文化の頃<sub>レ</sub>支邑令支  
ち村の沙若千<sub>レ</sub>孝行りてホウ聚斎<sub>レ</sub>かがく

### 名產綿曳轆轤

因村<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>他小<sub>レ</sub>てユ合<sub>レ</sub>エ人多くうて是とくう説<sub>レ</sub>ハハハハ

### 神戸村

一官の北小野ノ影木戸村小野ノ寺<sub>レ</sub>と本神戸<sub>レ</sub>と和名抄<sub>レ</sub>中島郡神戸ノ月

### 酒見神社

本神戸村小野ノ今井切社<sub>レ</sub>延喜神名式小酒見神社<sub>レ</sub>本國帳小  
称後又俗に北大門大明神<sub>レ</sub>

### 從一位酒見名神

しりう大社<sub>レ</sub>神鳳抄小尾張國酒見御厨<sub>レ</sub>かくい伊

### 酒三岳

一<sub>レ</sub>皇宇沙汰文小尾張國酒見御厨<sub>レ</sub>かくい伊勢の神宮<sub>レ</sub>神酒と奉<sub>レ</sub>御厨の地<sub>レ</sub>社號とく称を酒見

### 勢の神宮

一<sub>レ</sub>外宮の酒殿小ま<sub>レ</sub>ナ次宇賀乃咩命と効請

### 酒弥豆

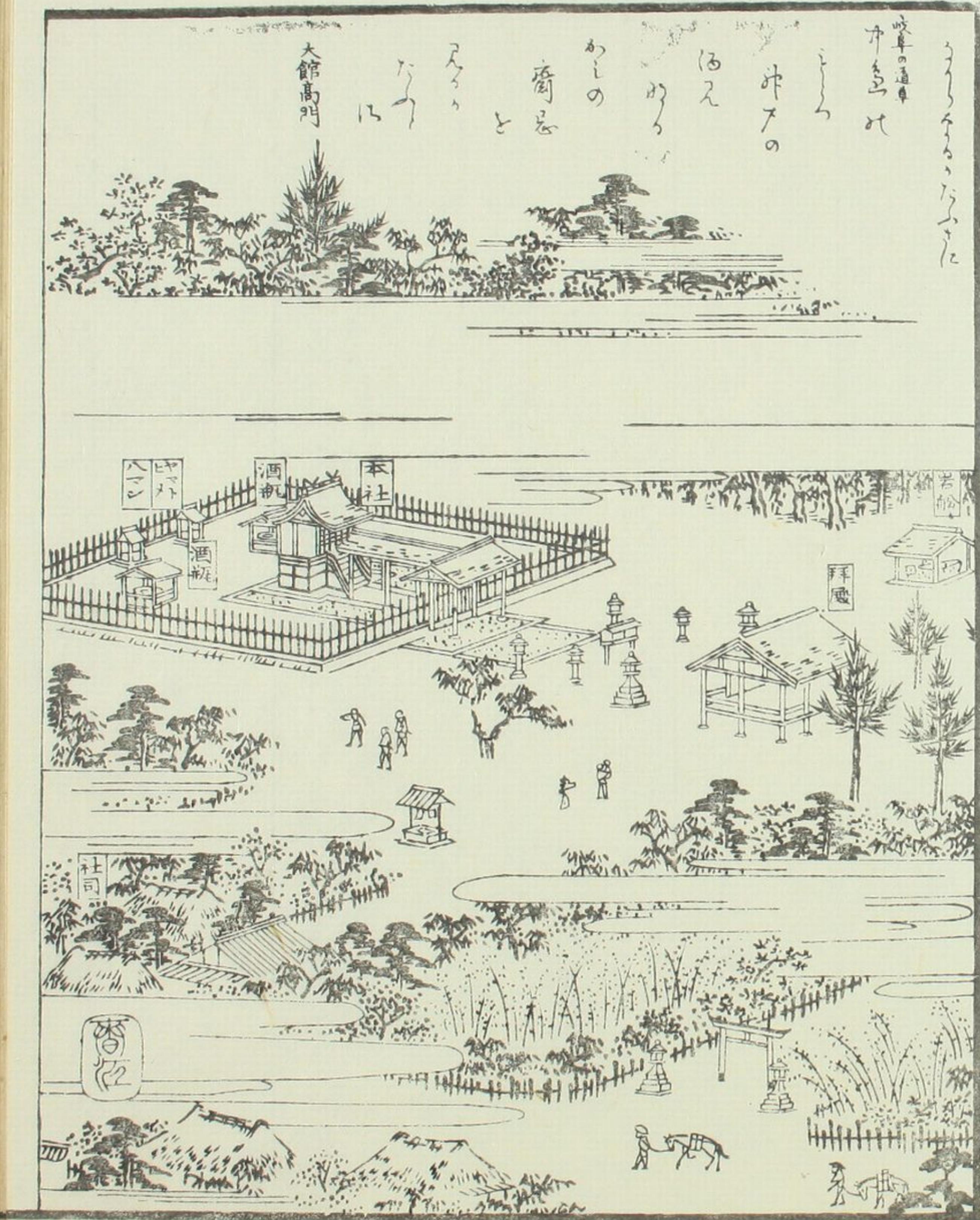
の畠<sub>レ</sub>外宮の酒殿小ま<sub>レ</sub>ナ次宇賀乃咩命と効請

### 一<sub>レ</sub>祀

一<sub>レ</sub>社<sub>レ</sub>境内小じうの酒甕のこうては古記<sub>レ</sub>もにこよ小

酒見神社

おおきの里へつづくと曰へまゆる  
小ちとしむしをオノの里へかね  
行わきにほん宮へしも年も  
うそてまより一ひる酒の官  
ときのあつまつすが事内  
さんざりがたぬだあき店の主の  
よそへうそとへんぐる宮へか  
みおうへとまくらむつる  
みゆきすう様のうち齋忌  
やまひうの命がまつる。作は  
後とやまか田久良門の宮遷幸一  
たゞいは宮所不遷幸一なりて  
あそくはたまへれのけむ作  
は書して奉り。又齋忌がゆ  
う今のかまのうてえすなが  
あそくはたまへれのけむ作  
は書の太行沖の主にこ新あふ  
比申のゆぢやうとてはる國  
素の野代の宮へ遷幸一  
へんじゆの宮へほんもわ  
うかんとおりくと齋忌のゆ



○末社 倭姫命社 八幡社 例祭 八月十六日馬ノ頭 祠官 伊藤氏

山王社 秋葉社

神戸氏宅址 同村の久れど今其居地を 八幡川親元記 寛正六年二月朔日武庫御被

七郎 御見奉太刀代金

五百疋 折紙 三三 三三

新神戸村 本神戸馬寄等の西小門より里通り天慶年中平將門追討神 御会 おも の神戸のからと新神戸 と名付らるゝ舊地 扶桑略記 云天慶三年庚子八月廿七日尾張三河 遠江三箇國封戸各十烟有 勅奉寄 伊勢太神宮 是乱逆間為遂賽也 太神宮諸雜古文記 云天慶四年三月廿八日依官省符尾張 卷川遠江等郡神封戸各拾烟被奉寄於太神宮已了 今号新神戸是也 依將門追討之御祈禱也以上之二書 年月が一月より入神鳳抄 以二宮新神戸田八十町一及畠七町三百歩を 神宮雜例集に尾張國 六十 本神戸 新加神戸 十 とわろも の事 野宮神明社 新神戸村より伊勢の御封戸の地より齋官寮の官人を 富士塚 馬寄村より一巨岩松樹茂りと云ひ名づく 富士後院の

三明神社

同村の彦神 一月廿五日 年唐洋 八幡境内末社子守社

若宮八幡社 稻荷社 白山

彼岸縄手地藏

同村の支邑六地蔵村よりあふぐ地蔵の一所として世にすくねる

身

天神社西宮社等あり又神宮寺堂境内より

神宝のうち兜鎧鞞ハ苗村の伝

武藤氏宅址

同村より信長公の従士武者跡年多處所

身

の成功ありと云ひ信長記惣見記等と見る

神明社

奥村小向より本土神より勅請年月不詳 明應九年庚申年正月廿七日

神明社廉汚助を即開貞の再建よりはと伊勢の神祇の地より移し

馬の辺と生歴社僧妙福寺祠官木全氏

太子山瀬邊了泉寺

同村小向一向宗

京都東木山直末

顛部七門徒の一にてちに方便法

身の像あり永正十年の教如上人裏書小曰中島郡笑笛莊内籠綱

奥村龍泉坊屬中莊より大谷遺跡錄

も收入せりと聖德太子の画像ありこれ太子自ら書きゆき所にて世小稀うりと

其外蓮如上人華の阿弥陀の像あり

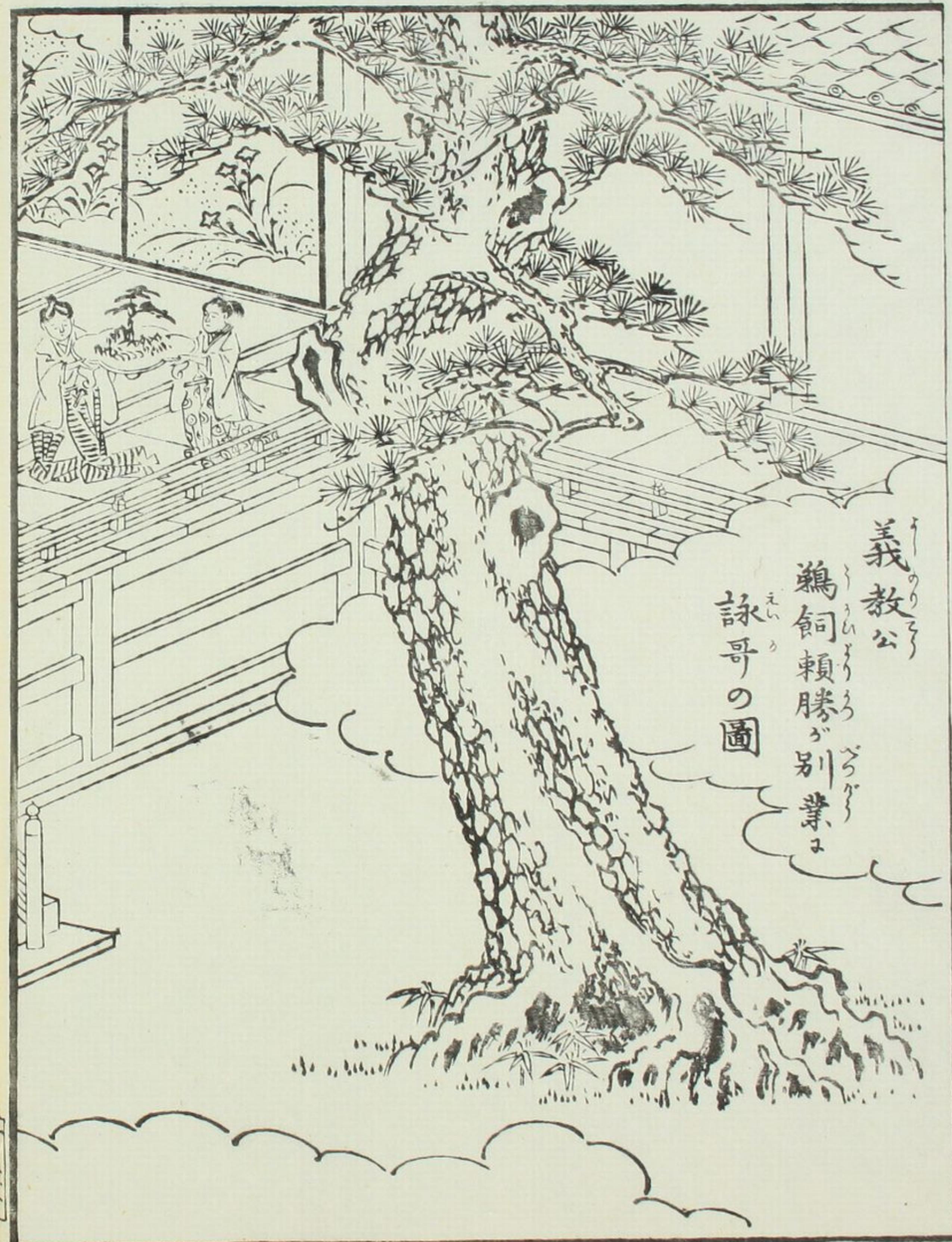
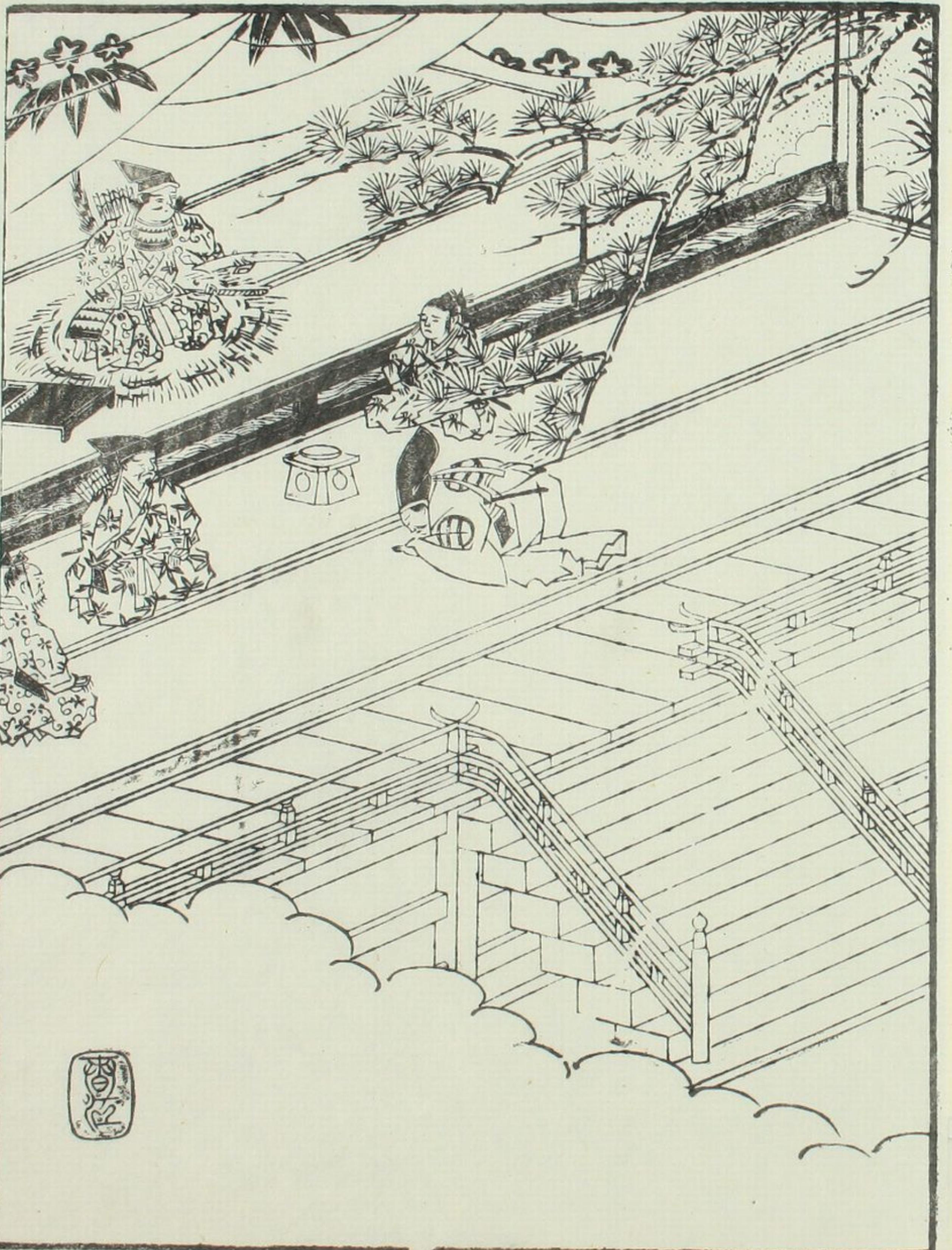
彦根七門徒の半ば竹小向より

身にうつ足近の渡りと越後川水もてあ渡一かく教もうふはうせんの

伝承ありと分金と桂川の渡がくと越へと越さむと云ひと云ひと其の際の際をと感ト

大浦小津等のるに名手と書ゆ一彼世人にどうり其手跡をひども是と云ふ故一堂宇と

ゆれと被名号とをもとめられば彦根の傳説うとソひてへとれど云はれ



まへて御郷村もあらう近きればさらの地名か

とくとすあぐーあぐーあぐーて後考をす

### 西方寺

因村から一向宗東流  
三河国伏木上宮寺末

南寺も御郷七門後のうちりて親寧寺

人の所僧玄了の開基とし、文明年中僧正夢中與すりて寺宝に蓮如上人真華の名号一樋り。天文五年火災小焼失。其像小ちつて此の火ふとろげく小さき佛像のやくちとくら今に寺に廻して立也。此の火ふとろげく小さき佛像のやくちとくら今に寺に廻して

詮仁と開廟して諸人小拜せし。南とも亦また跡源のゆき

### 正念寺

萩安賀新田にあり一向宗京都本部を引き走まり勢州も終に

### 野府古城

古府村から當村ハ神鳳抄に笑生御厨と云ふ。又古書に笑生庄と云ふ。舊地にて信長公の子鐵田九郎信治尾州野夫城主と鐵田軍記尾陽雜記等小

ちう其孫元龜元年九月十九日信治追江の坂を下て戰死のうち廢城と

### 御裳天神社

板倉村から本國帳小徒三位御裳天神とあり古社されど今微しくる

### 義教公諱哥松

西年正月上旬神明社と建之。今其神明宮よりて大ねとく村の生土神とす

### 御裳天神社

毛愛村から今其神明宮よりて水享年中義教公富士御覽の通路落葉所の精霊贋勝館へ

### 義教公諱哥松

入らせゆる處の古松と御覽ありて納リ軒梁より松の梢あるこより一入をさるかと説ド

### 浅井田宮丸城跡

毛愛村から其あと赤井四十二向南から三十二石内から二キ塗のゆきら残り近に

### 鶴洞山國照寺

因村から日蓮宗と云ふ。丹波郡墨金村からと享禄三

庚寅年当地易地セリ。靈宝の日蓮大士金銅の像ハ世小たぐり  
かく古像にて形錄と小字と背小銘と彌けて寛正六ノ酉年  
御郷村に其の子藤連清とて以斯小所從之

二月十六日日親より其外古品多々中に罄わくて銘小曰藤嶋



賢林寺勸進僧公明天福二年甲午二月十五日とるべより

山川景寺

光景山蓮照寺成等山心證寺同家の寺院並び立て十月廿日の會式

あ村も景

小村も景

小村は小手多く清もん人多めの跡へきて余詫の足とぞむ

### 孝貞女三輪の傳

同村の旧家彦馬房とソリ者の中五家の内母娘初年う又孝  
三輪セ七家の内子もく汝う夫安を妻麻衣と嫁り一曰より子モナ  
ありて其の母とバ別居アリテ母娘の事無夫婦の事無夫婦  
夫婦とくして元標んを主にわづ白髮夫婦の交合と申すを併記  
小主入又つくて孝行をうばまの外抱子の事無夫婦年月と送りて室居土年父死  
ほはナシク夫にづく多きと其頃娘子のうかこうつまくビトアリセリ  
けとベ三輪の孝貞世にくれて作ふ因ちもナリて天明六年四月孝貞と妻トアリ  
青洞岩千賀りの其日事の序にミハ頂と作トキタマニ室ニシテトナリモナリ  
弔ひ文化三年五月八日

五星にて病死セ

### 宮ノ地花池村

和名抄中島郡美和トアリ舊号アリ  
大三輪の神の御殿也宮の地トアリ

### 大神神社

同村もアリ今大三輪の神の御殿也宮の地トアリ

### 大神神社

三明神と称次

延喜式内と本國帳と從一位大神名神トアリ  
ナ祭神大美和都祐命ハ天火明命の十世の孫アレバ尾張氏同祖の

御神アリ南云小町門司アリウムリ大和の三輪とハ列神アリ

### 蓮花池跡

因村から今引れて田うちびしげ池の蓮の花と麦麺とニ種毎年七月七日  
奥報恩トアリ

大應國師と開創の始祖

其後絶えずたるモ元池と云ふ村名のうて今も阿村

### 長嶋山妙興報恩禪寺

御真寺村かアリ

祥宗

### 貞治四年建立成乾一後光嚴帝勅願の道場

久我内

大臣右大將通相公寺境三十三町六段二百八十步と寄附一絆いぬ

### 圓光大照禪師宗興滅宗和尚の建立

師年四十二年の内考妣寛阿勝

創建すアリ大應國師と開創の始祖

ア

大和南浦紹明大和尚

トモアリ圓通大應國師と勅謚モ後金達モも此住職うる滅宗ハ

嵯峨天皇の御子左大臣源融公の裔孫中島藏人中島郡中島の子

息うる延喜三年誕生わくが幼號アリて聰明秀才比類アリ七景

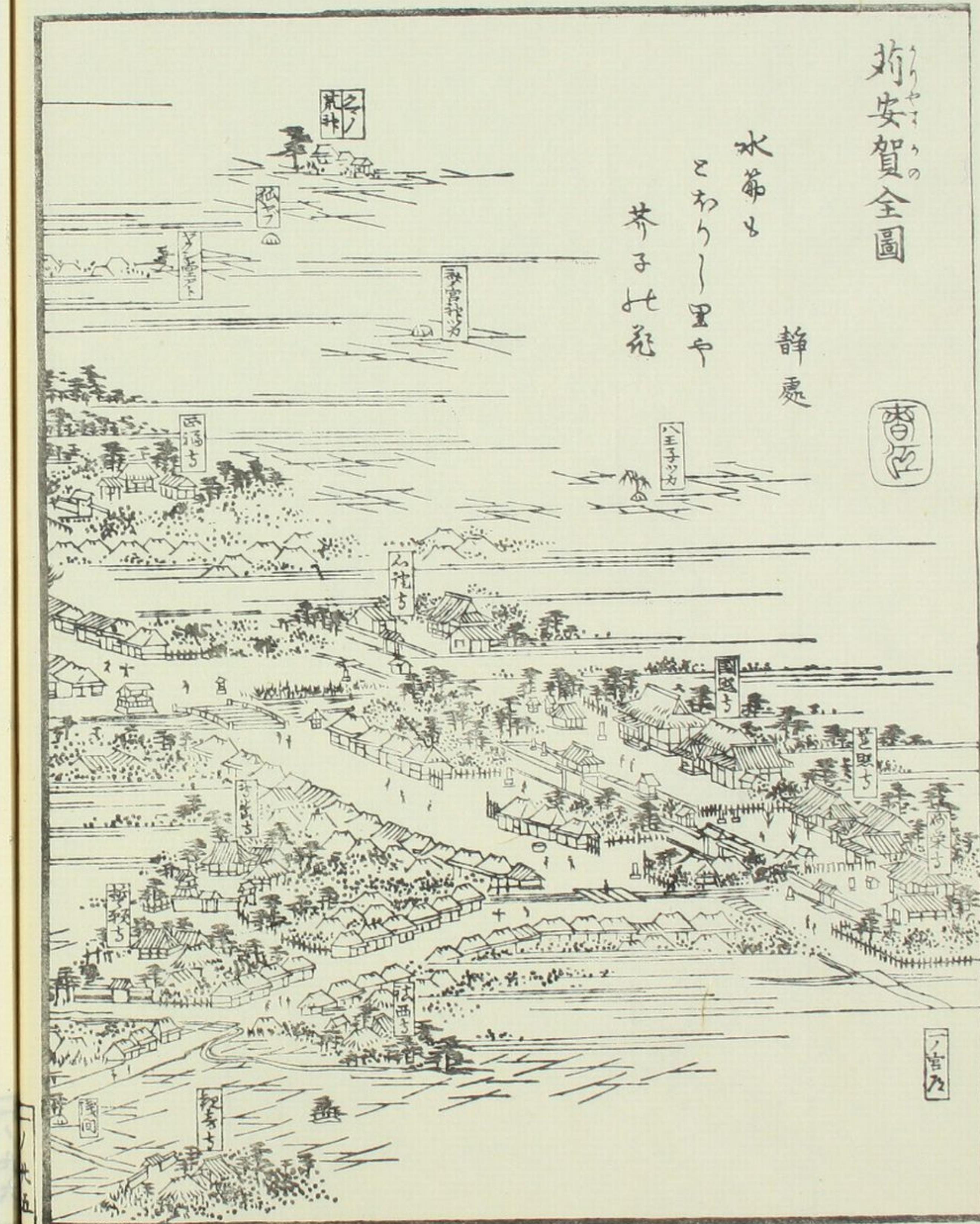
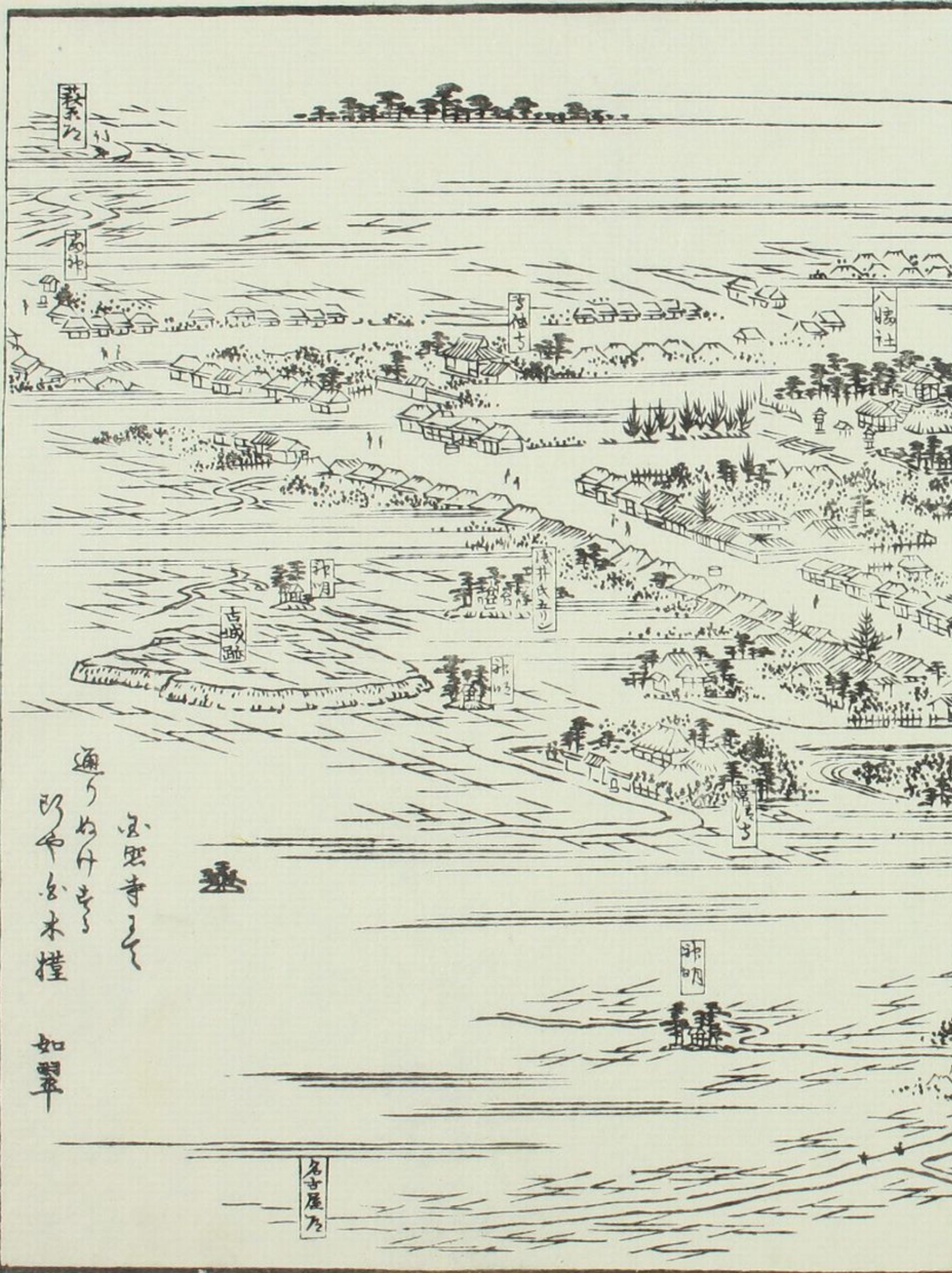
の附り。既高堂に挂け羣兒と共に様下と観る者て人ハからむ者を

つてアリ我ハまるまことソリケリとて嘗構の志と起らう又藏

人の志と察一柏菴和尚小附して出立あこひ柏菴ハ大應和尚

の弟子ナリケリバやうて遠長ちもつとよりもあくに業と受カセ

シ



夫より蕪舎に在りて年數後り學業うるて後かふ小ゆり四十二舉  
にて貞和四年幽寺と創建は其が所くに八宇の梵刹と建立  
又近江屋張渡河の三ヶ國に接待院と開きて雲水の僧と養つて  
或時熱田ふとまほー神社の荒廢ーつとひよし候活と加破候と  
廻覆りけりとば被承候びて熱田の社領のうち中島郡鈴置郷今の大谷村  
と妙鳥寺小寄附わらす其時の大宮司の達今に寺室と汝  
又大神の託宣と龜尾と大宮司常端より梅樹十株とあちに  
植ゑられ境内小植ゑ一宇の坊と達て十梅院と号く今の開山塔とよ  
えりかくて早とおと厚くに其株多く枯擣して今もぐり一二株の  
こより希代の古梅うらえじり弘法大師契因社と傳復わらす内  
社人ふ示しけり七百年の後まことに修造する傍わゞ一ノ其名と  
與しより奥ハ弘うり則我再延うりとひ年うり寺記ふうり又  
一宮村比丘ちにむり観勝とよ傍わゞ二ノ智行西と云は仰て  
常に宗祖弘法大師とよひうり或時辨座観念して居に忽ち  
神童一人來りて告るべ汝ちゞや今もせ大師うとを詠り  
坐て拜玉とよ観勝走り出で見よバ大照禪師うり観勝あ  
やて大師うとよ詠りとよ神童禪師とよて見よと見よ  
観勝うとよ是大師小わざめ興よ禪師の冥宗うと神童又言て興  
と弘とよニウラじやうと詠りて消セ地藏寺の傳記  
少もぞうされど興よ禪師の冥名宗興とよ弘とよ大師の溢  
号弘法とよかとば大師な生の日契田の社人小鳥ハ弘うりと  
いふれりとよわるまくこれぞ當くあちの傳後からてあくびのみ  
和尚寺院興隆の功ハ元末ちく京師難波有馬小坂又九州筑  
前寺に周慶モトヨシと名參とひく永徳二年壬戌七月廿一日年七十  
三十一エヌ示寂スル圓光大照禪師と溢タツと委と傳、享徳二年無隱德吉  
状又本朝も傳傳延生傳既終和尚著す所の圓光大照禪師行  
扶桑禪林傳宝傳等にそぞり南寺ハ母小勝モチ津城ツシマにて代シテの輪旨院

妙興寺

蓬島話洛

尾之妙與丈室  
會住持誕慶甫  
正月廿七日

萬里居士

梅華共歲  
豐華原鄉阿

每東春雲捧

出碧羅宮滿

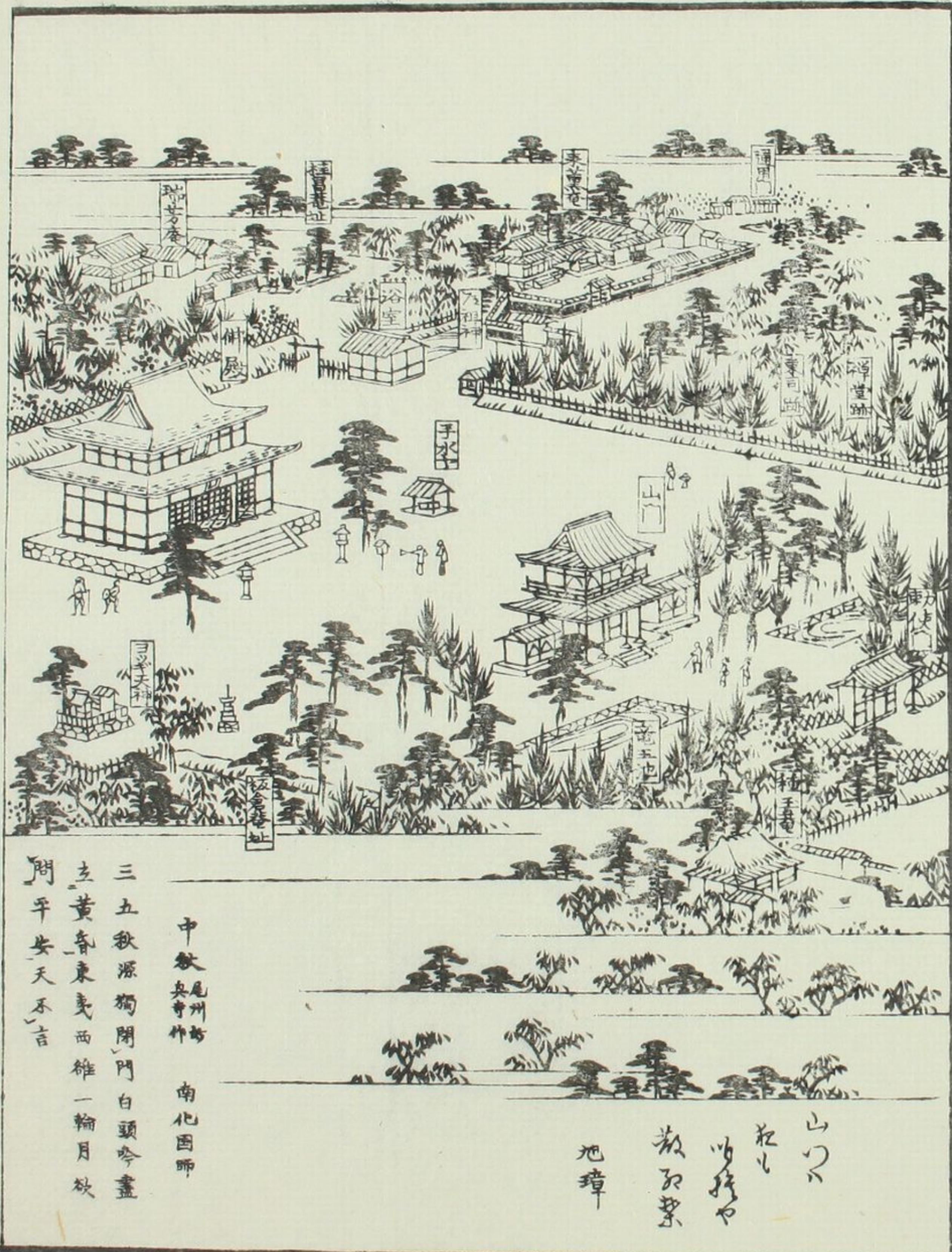
身餘習鶴應

罵十梅花前

九洛中



妙興寺



中款  
尾州作  
南化因師  
三五秋深獨開門白頭吟盡  
立黃昏東夷西雜一輪月放  
問平安天不言

其二

尾陽妙興寺  
寺者為董林  
固久矣在去  
府城三十里  
西北春日舉  
與二三子步  
遊法苑三日及  
歸賦一絕云

清水春流

鶴虛集  
覺城從來冠

尾陽空中突

兀對春光偷

閒今日忘塵

俗華下風前

吟興長



宣御教書御朱印御黒印諸院文等今に數通どうせ  
乙亥和ニ癸巳年將軍足利尊氏公 勅と奉じて國中無  
双禪刹の額と賜ひ承享四年壬子年足利義教公富士御  
覽の序尚ち帰駕とあらうと半日洋、庵わづて妙奥報恩  
禪寺の台華と塗と曰寺領と復ト安堵の御教書と  
なしきれ大檀那と称公の肖像と画き京都鹿苑寺瑞溪  
和尚の没と加へて今小もまも供奉する又日本名庭園  
小も尾州第一勝藍妙興報恩禪寺とある一續羣書類從小

妙奥報恩寺記とのせて世にかくらべる爲小國中無双の禅刹なり

と安盈弘り妙奥報恩禪寺の額ハ普廣院義教持軍の台筆う  
火災小堂塔多く焼くにあつてどもひきゆくはれども再建上棟の棟札うて應永  
二十九年壬寅十一月十五日と見えりた侍よけ堂ハ竹田の番匠ばんじょうが作る所と見えりし他小  
美御り是よりて凡人の役所を行ふ堂内うちの須弥壇櫛干の形を結構うるも甚  
鶴つるくうて彩色も空ふんばざくに像岡  
開山塔 南面大痴國師 大照禪師の二  
ち堂の石塔也又十梅院と号ひ

卷之三

四十九

二四

て、其の後尚もう傳來の「裏書」に承認し、  
而して天祥菴とも号す明の可菴  
書院

寺記小見より 懸門

衆察其跡をや爾山在母の内ニ百餘人の庶傍外門と  
勅額とヤク勅使門中門とニの門とよ山門  
勅賜國中無双禪刹トヨリ長島山の額とあり

鐘樓

居し日食達也年貳と於ケハ少々高も破壊一柱礎のみありて中  
どむ」とあるうへとさうあれど今れど此造也

次享德ニ稔龍集發  
て古物ノ  
髣吉觀音書

善一トアレ因所小天祥菴の達もわくて詔りモレヒハシル墨  
酉孟秋日守塔比丘徳吾誌焉モ因所小豆木のち被ヒソラウ  
寺宝うる足利尊氏公の念持佛うる近き頃住吉口辨  
堂小堂と建て安置リ是ノ義文公却奉肉ウ

財天社 天神社

世徳天闕宮ト称す太宰府鹿苑の小枝と  
りて寛永年中刻む所の小像より 灵寶涅槃像  
人の大幅の絹地より 京都 泉涌寺の開山俊秀国師宋國より持来

道慶入道為現當二世  
奉寄附者也于時文明  
画幅”往一年 四

仁大亂當寺西錄之刻此尊像紛失處八幡鄉內從一位町長谷川  
六親眷屬以過分財錢令買得  
六十戊戌年二月十五日  
觀音竜虎三幅對 牧溪和  
尚筆此  
祖君御貲り其事清輕小納り  
之  
題額  
一幅牧溪

筆りかの無立幅對  
うそと今ハ別幅

本居宣長の數少入と  
大嶺藥山圖二幅和尙  
鶴鳴画 玉磯  
墨梅 楊補之  
閑極法雲和尚墨跡  
維

摩居士贊

石林和尚 謂子昂書

張瑞圖書 人物圖

趙千里筆 墨梅 雪崖 山水

唐寅 虛堂肖像

唐画筆 人物芭蕉松鬼三幅對

明梅四天王像四幅

唐画筆者不詳

詳十六羅漢像十六幅

同上十六善神

同上拾得圖

然可翁画妙

士像

然可翁画廣智國師贊

不動尊像妙澤和尚

觀音大

山水

周文同 雪舟筆

三聖人圖

同上福祿壽童三幅對

雪村筆

三幅對

啓書記華

蓮鷺圖二幅對

相阿

鷹圖

萬里居

竹雉子圖

足利義繩

張果良圖

永德筆

義教公肖像

瑞溪和尚筆

秀吉公肖像

南化國師贊

圖

快川國

夢窓國師墨跡

寧一山墨跡

大燈國師

墨跡

大照禪師墨跡

維摩居士讚

無住國師筆

一休和尚墨跡

悟溪和尚

大應國師

墨跡

古劍和尚墨跡

笑隱和尚墨跡

天隱和尚墨跡

悟溪和尚

墨跡

特芳和尚墨跡

慶甫二字

九洲和諸山疏

葉彦和

記

附妙奧寺記

無隱德吉和尚筆

尊氏公手蹟

觀應三年六月十三日花押

秀吉公自詠

和歌

自後醍醐天皇末寺圓光寺境內安堵綸旨

元弘三年十月八日後光嚴

帝境內安堵綸旨

文和四年十一月九日延文四年八月七日

同寺領安堵綸旨

貞治五年四月十一日同熱

田院宣

貞治四年十二月土日伏見帝熱田院宣

永仁六年九月一日

院宣綸旨

勅書教敕多

久我内大臣通相公境內寄進狀

延文四年二月廿日同五年閏四

月十日同享延狀小宇宙

月印

所

宇留と御印

御印天皇の御物

接摩面の矢の羽

枚筆の神功皇后の御物

御印

村上天皇より具平親王に

御印

御印

御印

御印

足利義詮公寺號御教書

長禄二年十月廿八日

同末寺圓光寺境內安堵御教

書

建武三年十月七日

義持平安堵御教書

應永十八年

御印

御印

植公安堵御教書

永正八年十二月廿九日

高階師貞證文

元年四月廿日細川武藏守

賴之證文

明德二年八月七日

細川勝元證文

長禄二年四月二日

斯波左兵衛義廉

證文 長禄四年

織田出雲守常竹

證文 應永土年 同伊勢守常松證

九月二日

應永土年 同伊勢守常松證

文 應永十五年 同達勝 證文 永正十三年 同

十二月廿五日

同達勝 證文 永正十三年 同

卅年九月 織田大和守 制札 嘉吉三年 同紀伊守廣遠制札

延德二年 同

九月三日

五郎制札 文龜三年十一月日出年宸翰より將軍家の御教書武家方の寄

一と次下

寄進狀 嘉慶二年十二月廿五日散位宗顯 貞和三年九月三日宗顯 同五年三月二日

小わせり

同

九月三日宗竺 觀應

元年七月十一日高階泰隆 延文四年三月二日頤西 貞治二年七月五日泰隆 應安四

年十月十八日沙弥宗天 同三年四月十五日僧宗賢 嘉慶元年十一月十五日沙弥宗覺

應永十二年十一月十五日直盛 同十六年八月廿二日沙弥宗直 同十八年八月廿二日宗深祥

同

同十九年五月十三日與元 同廿三年十二月廿三日岩間守清 同廿六年卯月十四日

了阿 永享元年十月廿日藤原久親 長祿二年四月七日元行 明應五年

二月九日祖恩已下四人 永正十二年十月十一日宗成 大永五年卯月二日達清讓渡狀

元應二年四月三日沙弥義念 元弘二年八月九日尾張齊俊 嘉慶二年二月廿四日沙弥帰

覺 正中三年八月廿日家賢 噴應二年七月五日沙弥善覺 貞和元年十二月八日女行

應永九年十月十六日沙弥常竹 同十年正月十一日良闇

同

同廿一年十二月十三日性秀 嘉吉三年三月四日全瑞 賣渡狀 弘安五年五月廿九日沙

同

同廿一年十二月十三日宗顯 同廿六年正月十一日安吉 同廿七年正月十一日尾張齊俊

同

同廿七年正月十一日安吉 同廿六年十月一日令精 永享

同

同廿七年正月十一日安吉 同廿六年十月一日令精 永享

六年十月廿三日長明 同十八年十月三日信德 同十九年十一月廿五日善弥六入道善秀 同廿

五年十二月十三日善政 同廿七年極月十七日牛太郎同後室 永享

二年十一月廿四日勝福寺住日海已下三人 康正元年十月三日宗文 買却狀 貞和五年

同

沙弥覺乘 觀應元年十月八日源祐俊 康安二年二月三日源清貞 貞治五年五月三日泰

隆 同六年九月廿六日高階経久左京亮直經 明德五年十一月十日安義已下三人 應永三年十一月

月十三日尾張宣俊 元弘二年正月十一日尾張齊俊 元德三年三月廿日藤原泰經 應永十

六年十月廿三日長明 同十八年十月三日信德 同十九年十一月廿五日善弥六入道善秀 同廿

五年十二月十三日善政 同廿七年極月十七日牛太郎同後室 永享

同

二年十一月廿四日勝福寺住日海已下三人 康正元年十月三日宗文 買却狀 貞和五年

同

沙弥覺乘 觀應元年十月八日源祐俊 康安二年二月三日源清貞 貞治五年五月三日泰

隆 同六年九月廿六日高階経久左京亮直經 明德五年十一月十日安義已下三人 應永三年十一月

月十三日尾張宣俊 元弘二年正月十一日尾張齊俊 元德三年三月廿日藤原泰經 應永十

六年十月廿三日長明 同十八年十月三日信德 同十九年十一月廿五日善弥六入道善秀 同廿

五年十二月十三日善政 同廿七年極月十七日牛太郎同後室 永享

同

二年十一月廿四日勝福寺住日海已下三人 康正元年十月三日宗文 買却狀 貞和五年

同

沙弥覺乘 觀應元年十月八日源祐俊 康安二年二月三日源清貞 貞治五年五月三日泰

隆 同六年九月廿六日高階経久左京亮直經 明德五年十一月十日安義已下三人 應永三年十一月

月十三日尾張宣俊 元弘二年正月十一日尾張齊俊 元德三年三月廿日藤原泰經 應永十

六年十月廿三日長明 同十八年十月三日信德 同十九年十一月廿五日善弥六入道善秀 同廿

五年十二月十三日善政 同廿七年極月十七日牛太郎同後室 永享

同

二年十一月廿四日勝福寺住日海已下三人 康正元年十月三日宗文 買却狀 貞和五年

同

沙弥覺乘 觀應元年十月八日源祐俊 康安二年二月三日源清貞 貞治五年五月三日泰

隆 同六年九月廿六日高階経久左京亮直經 明德五年十一月十日安義已下三人 應永三年十一月

月十三日尾張宣俊 元弘二年正月十一日尾張齊俊 元德三年三月廿日藤原泰經 應永十

六年十月廿三日長明 同十八年十月三日信德 同十九年十一月廿五日善弥六入道善秀 同廿

五年十二月十三日善政 同廿七年極月十七日牛太郎同後室 永享

同

二年十一月廿四日勝福寺住日海已下三人 康正元年十月三日宗文 買却狀 貞和五年

同

沙弥覺乘 觀應元年十月八日源祐俊 康安二年二月三日源清貞 貞治五年五月三日泰

隆 同六年九月廿六日高階経久左京亮直經 明德五年十一月十日安義已下三人 應永三年十一月

月十三日尾張宣俊 元弘二年正月十一日尾張齊俊 元德三年三月廿日藤原泰經 應永十

六年十月廿三日長明 同十八年十月三日信德 同十九年十一月廿五日善弥六入道善秀 同廿

五年十二月十三日善政 同廿七年極月十七日牛太郎同後室 永享

同

二年十一月廿四日勝福寺住日海已下三人 康正元年十月三日宗文 買却狀 貞和五年

同

沙弥覺乘 觀應元年十月八日源祐俊 康安二年二月三日源清貞 貞治五年五月三日泰

隆 同六年九月廿六日高階経久左京亮直經 明德五年十一月十日安義已下三人 應永三年十一月

月十三日尾張宣俊 元弘二年正月十一日尾張齊俊 元德三年三月廿日藤原泰經 應永十

六年十月廿三日長明 同十八年十月三日信德 同十九年十一月廿五日善弥六入道善秀 同廿

五年十二月十三日善政 同廿七年極月十七日牛太郎同後室 永享

同

二年十一月廿四日勝福寺住日海已下三人 康正元年十月三日宗文 買却狀 貞和五年

同

沙弥覺乘 觀應元年十月八日源祐俊 康安二年二月三日源清貞 貞治五年五月三日泰

隆 同六年九月廿六日高階経久左京亮直經 明德五年十一月十日安義已下三人 應永三年十一月

月十三日尾張宣俊 元弘二年正月十一日尾張齊俊 元德三年三月廿日藤原泰經 應永十

六年十月廿三日長明 同十八年十月三日信德 同十九年十一月廿五日善弥六入道善秀 同廿

五年十二月十三日善政 同廿七年極月十七日牛太郎同後室 永享

同

二年十一月廿四日勝福寺住日海已下三人 康正元年十月三日宗文 買却狀 貞和五年

同

沙弥覺乘 觀應元年十月八日源祐俊 康安二年二月三日源清貞 貞治五年五月三日泰

隆 同六年九月廿六日高階経久左京亮直經 明德五年十一月十日安義已下三人 應永三年十一月

月十三日尾張宣俊 元弘二年正月十一日尾張齊俊 元德三年三月廿日藤原泰經 應永十

六年十月廿三日長明 同十八年十月三日信德 同十九年十一月廿五日善弥六入道善秀 同廿

五年十二月十三日善政 同廿七年極月十七日牛太郎同後室 永享

同

二年十一月廿四日勝福寺住日海已下三人 康正元年十月三日宗文 買却狀 貞和五年

同

沙弥覺乘 觀應元年十月八日源祐俊 康安二年二月三日源清貞 貞治五年五月三日泰

隆 同六年九月廿六日高階経久左京亮直經 明德五年十一月十日安義已下三人 應永三年十一月

月十三日尾張宣俊 元弘二年正月十一日尾張齊俊 元德三年三月廿日藤原泰經 應永十

六年十月廿三日長明 同十八年十月三日信德 同十九年十一月廿五日善弥六入道善秀 同廿

五年十二月十三日善政 同廿七年極月十七日牛太郎同後室 永享

同

二年十一月廿四日勝福寺住日海已下三人 康正元年十月三日宗文 買却狀 貞和五年

同

沙弥覺乘 觀應元年十月八日源祐俊 康安二年二月三日源清貞 貞治五年五月三日泰

隆 同六年九月廿六日高階経久左京亮直經 明德五年十一月十日安義已下三人 應永三年十一月

月十三日尾張宣俊 元弘二年正月十一日尾張齊俊 元德三年三月廿日藤原泰經 應永十

六年十月廿三日長明 同十八年十月三日信德 同十九年十一月廿五日善弥六入道善秀 同廿

五年十二月十三日善政 同廿七年極月十七日牛太郎同後室 永享

同

二年十一月廿四日勝福寺住日海已下三人 康正元年十月三日宗文 買却狀 貞和五年

同

沙弥覺乘 觀應元年十月八日源祐俊 康安二年二月三日源清貞 貞治五年五月三日泰

隆 同六年九月廿六日高階経久左京亮直經 明德五年十一月十日安義已下三人 應永三年十一月

月十三日尾張宣俊 元弘二年正月十一日尾張齊俊 元德三年三月廿日藤原泰經 應永十

六年十月廿三日長明 同十八年十月三日信德 同十九年十一月廿五日善弥六入道善秀 同廿

五年十二月十三日善政 同廿七年極月十七日牛太郎同後室 永享

同

二年十一月廿四日勝福寺住日海已下三人 康正元年十月三日宗文 買却狀 貞和五年

同

沙弥覺乘 觀應元年十月八日源祐俊 康安二年二月三日源清貞 貞治五年五月三日泰

隆 同六年九月廿六日高階経久左京亮直經 明德五年十一月十日安義已下三人 應永三年十一月

月十三日尾張宣俊 元弘二年正月十一日尾張齊俊 元德三年三月廿日藤原泰經 應永十

六年十月廿三日長明 同十八年十月三日信德 同十九年十一月廿五日善弥六入道善秀 同廿

五年十二月十三日善政 同廿七年極月十七日牛太郎同後室 永享

同

二年十一月廿四日勝福寺住日海已下三人 康正元年十月三日宗文 買却狀 貞和五年

同

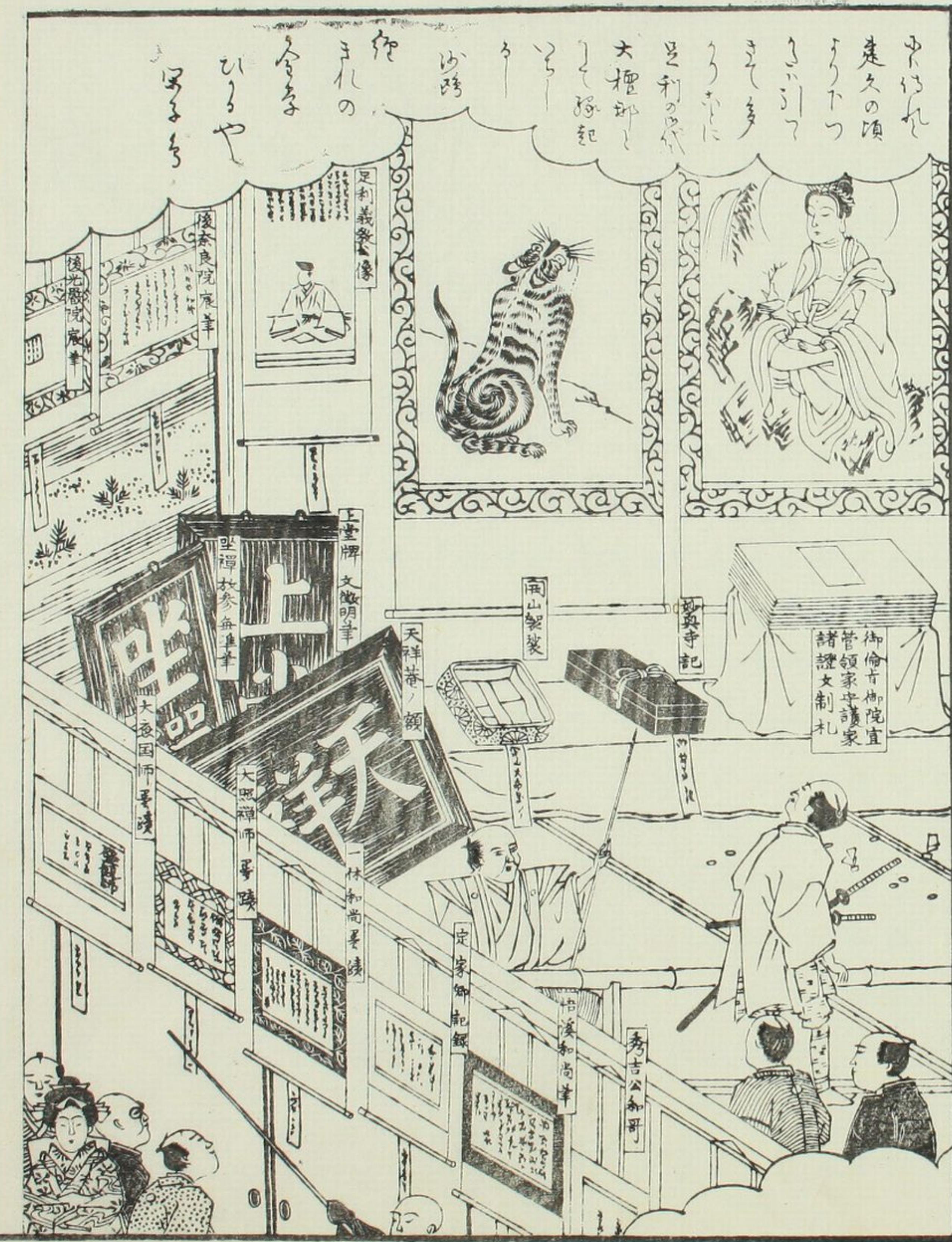
沙弥覺乘 觀應元年十月八日源祐俊 康安二年二月三日源清貞 貞治五年五月三日泰

妙興寺靈寶  
弘通の略圖

建仁寺天慶華

謂譜狀五十余通内

香社



牌

張即之筆

普凹向浴佛偈二枚

同華

聯

趙子昂筆

額

清の一文字文徵明筆

同

上堂の二字同華

阿古

應國師

袈裟

一大照禪師

袈裟

一南化國師

袈裟

一南化國師

袈裟

同

時画古製大照禪師所持

秀吉公御膳

秀吉公御膳

同

秀吉公御膳

宝鈴

天竺製沉金

阿古

陀羅子

中島藏人寄附

中央

唐製慶甫和尚寄附

法磬

朝鮮製

鈴

南蠻製

獅子香爐

交趾製

屏風一雙

古法眼筆

香合

大小二具大照禪師所持

秀吉公御膳

秀吉公御膳

衣桁

秀吉公御膳

圓大勅

資慶杭通日謚

依州國虛為之善元州大本圓

古公建建師堂松道大路路應國通

帆主長穗諱之源支夫金中國閏大

未淨蘭寺紹傳岳而江鵝天師東應

掛慈溪淨明而夕為浙山竺塔道國

門隆辦字在一等真天銘相師

如庭公師南日傳一處相背有州塔

何高正學浦東而為行禪萬序巨銘

師峻元出駿者為大中寺壽福山

云學間世州建運慧書住永

瞧者航法安長庵果省持祚

望海年部禪岩一左沙禪

眼崖至十縣寺再為崇門寺

裡而宋五人圓傳虎周釋住

五却偏蘿出通而丘伯密持

須師參鬢藤大為隆琦詣延俊

彌往知受氏應虛々

堂禮識具如國堂三篆書撰

謁虛戒事師愚傳圓

寺禪貴上三東入年皮藏道老通書盡秋報透靜八又白一尚某云  
而刺遊皇十矣院秋無教珍僧首其處師衆脫定月却語日莫甲掛  
相延問召三其語從瑞東衛今座後再辭曰機中堂乘不使瞞後  
州對年為因西今拂既年源曰經歸這法起奉流失善人麼如  
太為者者宮參堂疊都夜提歸八長明過日漢王大過宗畫好和何  
守第車披徒器侍出始唱當十老知明本參法悟詔海手者堂尚師  
平一馬問日重者世開有本三眾客々堂禪身呈遷東頭寫云又云  
崇祖日善盛如呈築口十國無頭自說贈大全偈徑時築堂參作黃  
演德駢稱嘉此徑州鐵載丈力語發與以徹体曰山咸弄壽堂麼河  
請治集旨元又山之樹中永思龍明虛偈矣現忽俾淳金像去生向  
師丁又特甲明堂興生華四索峯後堂曰自時然師改圈請久堂  
即未以差辰年得德花歷年一會欲叟敵是人心與元栗贊而曰流  
署奉東住奉移之禪正徧也偈裡告東磕一相境俱之蓬堂令黃堂  
所旨山持太太寺是歸建臚家歸海門衆對共師夏大據典河云  
演故輩詔宰喜遂時未長行私日兒庭改不怠益六唐筆賓向未  
法闕下入府謂以之將蘭万袖本孫細觀相時策月國書客此在  
復東興萬京之眾嗣語佛溪里紙尋日揣咸知大効也裡日日流  
敷畱造壽師崇曰法文法即水求照轉聲淳堂地一是無紹夕師道  
奏正嘉禪福吾書永掛命程法知多路三巡山夕年人既咨云師  
請觀元寺太屈道并七脣典以詰客復頭年肇河故秋會明扣和云

而致為道國夏夜兩在日京上龍福者度電至莫九存主  
尤世別大來衆蕃之師四半雪崇祥額哀翔一興弟猶二論日問巨  
能代有荒昭之盛在之月岩火福雲曰慕友萬聖子達鼓其來恩福  
傾綿天之其歸若天門比阿遂者弟龍不等壽忠宗書手意無禮山  
誠歷地內化如圓下人丘發滅奉子翔已若心崇雲畢書明所優建  
事無開東也水通無宗省光求舍在塔千崇福宗即偶年來至長  
覺終鴻海是赴大間規吾迹所利建骨勅人福運意趺曰當明當興  
雄窮蒙東宜罄應乎所持之藏建長石謚奉超南等而呵延年入國  
銘既國海撰其得舍塔者舍圓龕崇禪千逝風慶臘寺禪  
金故君鯨曰寂師之行師烏利菴奉利通闔福卓有世罵戊月之寺  
銀宋臣濤尤之內狀住遠塔曰舍于大雄津南餘壽雨申廿夕明  
高太禮上著名外來築近失瑞利寺應獲聖禪人七佛脣九小年  
張宗樂與靈震也徵州尤所雲基之園設福圓嗣十祖月日參春  
釋散諸銀異海日言安異在他之後師利胤萬其有不廿去有  
梵淳夏漢殆國東銘國之門日塔山仍無建壽法四知九無曰太  
官風同通古道諸師山至人大日塔算長禪而坐一日所今上  
佛契國之聖聖方及大曰勅事什建分六機忽去年皇  
馳佛塔福廿憂半源普建聞崇仁居十督示衆臘降  
願主僧惟禪立駁天弟光寺福然列夏轉微驚月手  
轂上尤法寺年至忽子菴西皇龍崇剎所內疾訃廿詔

抑園所卓凡龍也。大行通有者，擊鼈應碩居國宗其。鼓龜示橫簡，撞淵中。利化龜，岐示。海光示，鷗有。其。宜石光，可禪上。瞻有，鷗撞。其。肅恭攻叢峯，終充鐘衷。工中。

宜佩寵天啓獸海山宣勒  
爾冕錫人覺鬼天君惟之  
雜盧異園圍茫蹠不川國于  
還印數繞蠹躅夜后以師  
來禮華詔起涕貴謹劬昭  
象盲益雨汎無長堂殿厥玄  
龍聾聲隆濛漾從庸徒虹  
功躬封號徒庸濛聲聾龍

群書一覽小序の後模刻本漢文の跋とて云大應國師の塔銘本州中島郡シマ山寺ヤマ在者  
益元人の刻す所よりて、後は其後走て碑銘とえ朝の賢豪小乞丸コイマル、海小  
航して是と辱しゆ。とよも年余原子聞と社て作の塔と拜、則合掌讚歎して曰四絕の  
記ニテ又三う佛と字よその法號の名と仰き文とあひりの後字の名と玩び士君  
ふべ則かふの人の大邦と欽す。すとを次其れり、との總て是師徒、高隱禪師と謀り模刻  
布施を寛改已未尾モ秦昂儀カウイ又嘉祐五年咸宗和尚著す所の大應錄カミヨクも後と  
出せりされど小矣りと  
今本書き下して記す 塔頭西住院 梅華充尽藏メイハ小尾之妙典寺  
菴に保童丸の法號とて賣某次元禄の娘也傍某隱居カウヒンジ可笑軒と号、小兒と療治次  
第小名古屋コトヤ小東コトヒ國君也と爲ひて居リと寺ツ久法寺と名づけ小兒科コノヒコとやくらし  
うのうちを御して寫仰アシタウ大陽菴  
も其紫法と失シ後今に賣矣す 耕雲庵 種玉菴 桂昌菴 瑞芳菴  
猿海道村カニマツうち三世大樹圓融禪師開基カイキ其後當ち中へ易代シテ寛正年中無隱和尚  
之小退去シテ丹羽郡タガタケ無隱和尚と并墓ツブツありと云々毎復徳音と云々同山行狀記

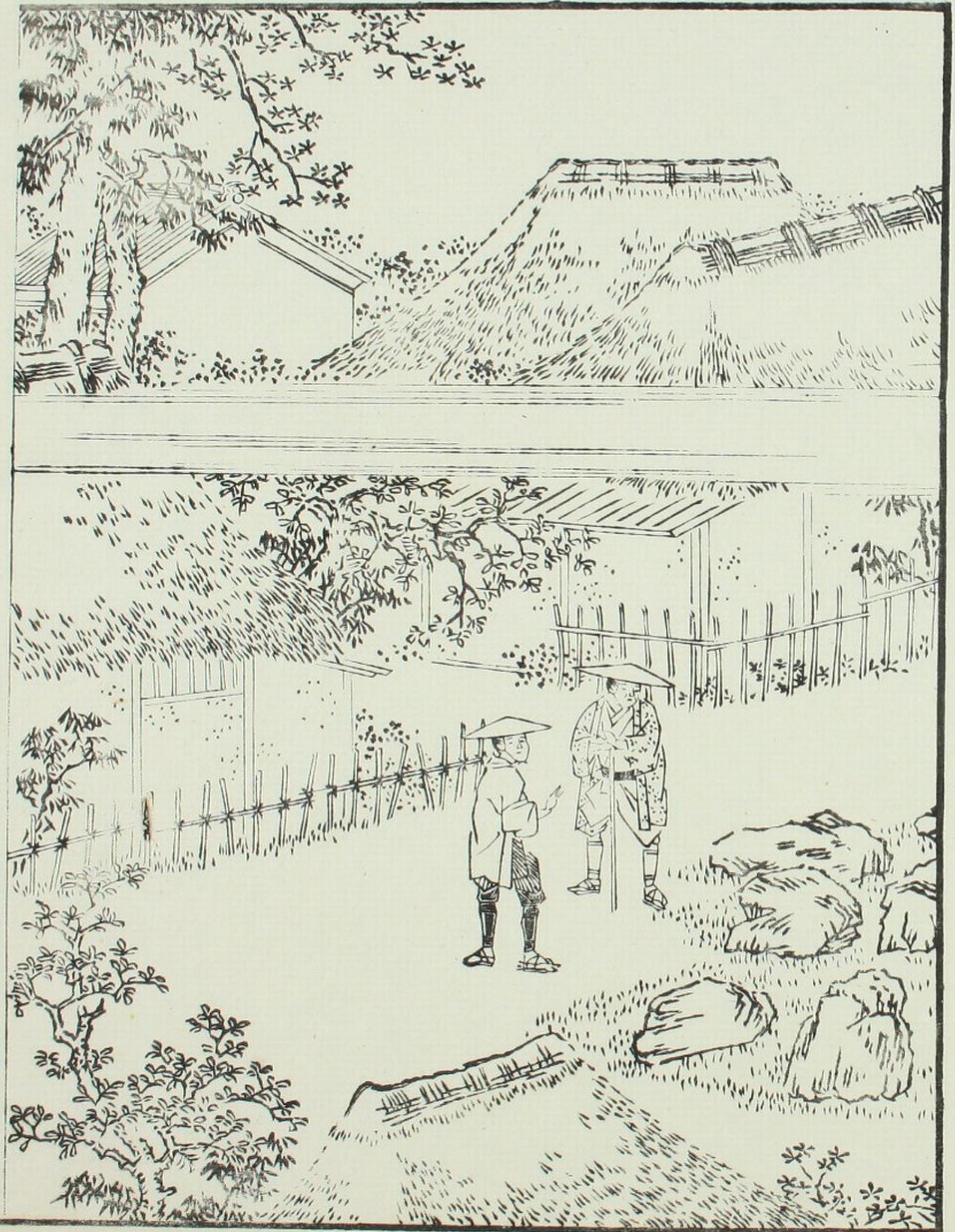
妙興寺記天祥菴鐘銘さじ書人うり文明元年寂す 清寥菴等

寺  
妙興寺  
圓田新川  
曉鬱連福  
開士遺蹟一  
勝鳥語出空廊可朝賜額無雙字  
傳風探勝兼憐禪寂地閑披貝葉坐繩林  
曉然寶殿類靈光壯麗偏驚甲四方樹結花鬱連福  
姓香探勝兼憐禪寂地閑披貝葉坐繩林

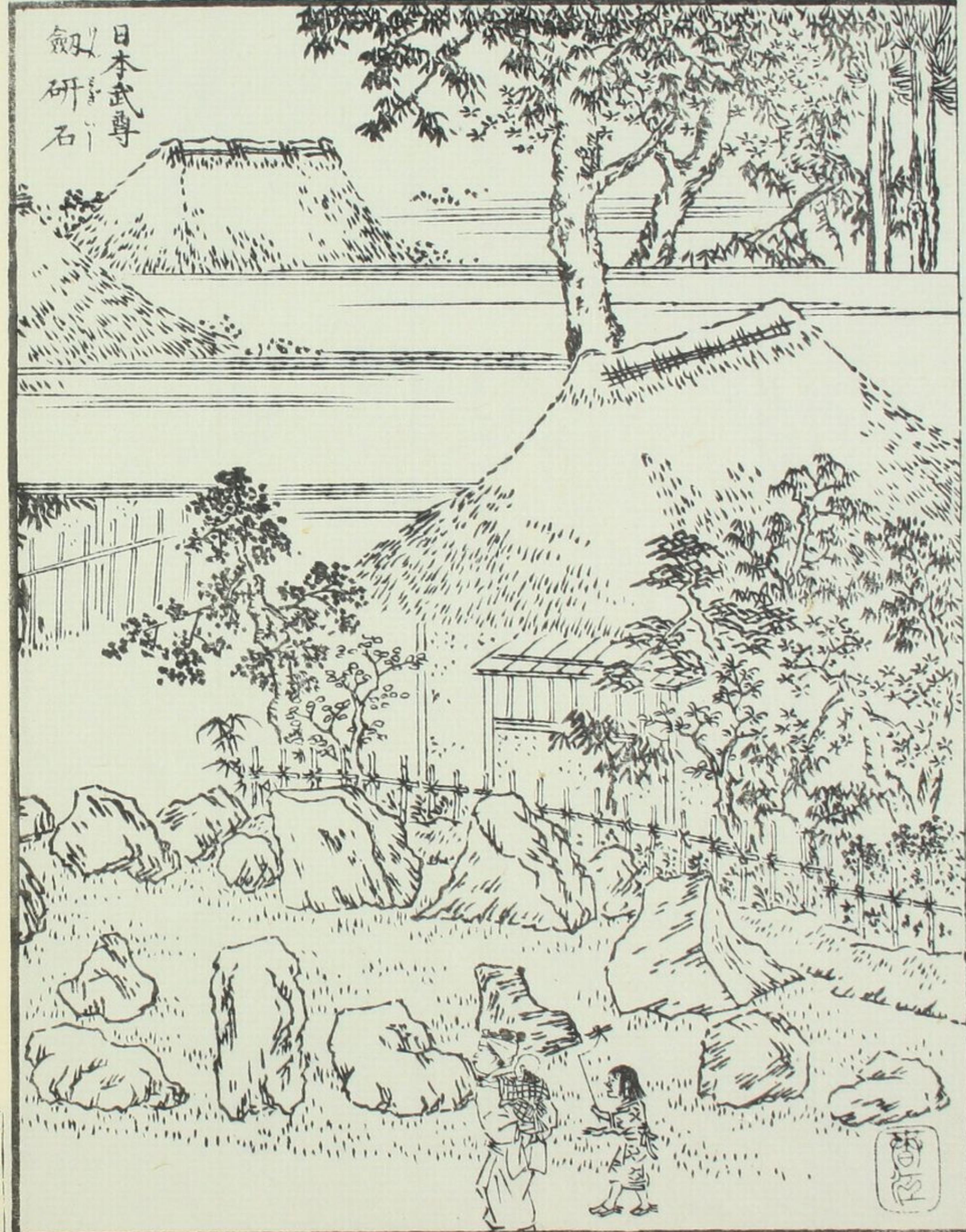
小栗海道小栗寺の南にあり今廢して因む小栗判官模山庄同と不和して庄司判官と害せんと謀そくと判官が妻照手姫ひめの娘うれじ父の謀と夫小告おほけとば判官蕪しらばと退しりぞき照手も父の勘亂かんらんとあり説わふと編歴へんれき口くち利皮病りひび字にうりけとば照手てらて夫と地車じしゃ小の包都いとう小の包いとう利皮りひとどもとども隣村赤池あかいけの里人安彦氏あひこの宅地たくち小栗海道のねとよ古木いのきの毛けとト小栗判官車街道くるわいじゆこうとよ淨福じやうふく狂言きやうげん小うりふ俗說ぞくせつうりさけとも諸ふともに此地このちのばくばくいい修しゆ行ゆき所よ又美濃みのの不破郡ふはぐん青墓せいぼとも照手姫ひめいい長者ながしや洋ひろ奉公ほうこう朝夕清水あさひと汲くきとせせ業わざとせせいいよ近ちかに根戸村いどむら小照手姫ひめの清水あさひとよ舊跡きゅうせきわくわくと濃州志畧のうしりょう小栗くり

実説じつせつ蕪倉大草紙しづく應永三十年の頃常陸國の住人小栗孫まご小郎滿重及まつじゆ連つづの事こと源持氏げんじの追お活か口くちと名なが其子小次郎助重患かして鎌倉の權現堂ごんげんどうとよ所ところ小行おぎ或たゞ敵あだりけりに竊くわりて強盜きょうとうと小次郎と殺ころ隨身まいしんの玉たまと奪だつひ取といいて毒酒どくしゅと進すすみみ餐くわつけと照姫てらひめとよ遊女ゆうめい其謀計そくめいとよもに小栗くり小告おほとば小次郎渴うと欲ほて呑のまま醉ゑ臥ふるるにわざむき夜中よなか宿しゆと逃おれお賊ぞ等だ盜ぬすとつあさ置おきる惡馬あくば小取とくを鞭むちとて若海わかうみの道場どうじょう小毛入いり又逃おのびて三河みかわ小來こらと往む後永享えいじょうの頃ごろ小次郎三河みかわとよ通とお今いまにひり照姫てらひめと尋たず出だ移うつくの家いえとわざくらうあらう其物語じぶつごと附つき合あと作り設つくけるよのから世よの流布りゆふとよ小栗實記くりじきとよ

城塚じょうづか戸塚村とづかむら村の中に巨岩おおいいはと日本武尊むすめ所ところ鍔つばと磨みがひととり傳つたへ城塚じょうづかと名なづけ村名むらとよりゆきされど其石の性せいがくとく城礎じょうのれとへと傳つた相模國高座郡さがみくにたかくらの戸塚とづかとよりゆき諸よ小多き地名ぢめいもとあるがく必大岩おほいはのゆうがどと例たとく同ひと村むらに藝田大神みけだいじん宮社ぐうしゃとよりて產土神うぶじんとすも城塚じょうづかの石車いはぐるとよりて云根志いんねんしふ尾州おづし中島郡なかじま城



二八三十六



墓村にて古代の壺と塙出せり、これ中に曲玉、神管石等あり。  
はて、上古十柄の御劍と研一所と清州中村正徳らの話。

墓村にて古代の毒と堵生せり。中に曲玉神管石等、不  
は不ノハ上古十柄の御歎と研一所と清洲寺中村正徳らの説々々

川曲うきの  
神社かみやしろ  
子生和村こぶせわむら  
延喜神名式えんぎしんめいしき 川曲神社かわくきじんじゃ 本園神名帳ほんえんしんめいじょう 小徒三住こしゆさんじゅ

河曲天神と考引り里俗十三權現と称するハ貞治の國帳の神階從

三位とわろと十三と心得たひとく  
末社熊野社御鍬社  
例祭八月廿一日

例祭八月廿一日

多神社と申す。本國帳小徒一位多名神とわる官社あり祭神ハ新撰姓氏録より多朝臣祖神神八井耳命とある。是神武天皇第二

文德實錄曰嘉祥三年九月神祇權少祐正六位上占部業基向尾張大神社告以賀瑞之由大祓於建禮門前以遣使也

同書曰 仁壽三年六月庚午以尾張國多天神預於名神  
同書曰 仁壽三年七月辛丑加尾張國多名神從五位上

三代實錄曰元慶元年閏二月廿六日戊戌按尾張國正五位下多名神主玉心上

拜師舊鄉  
中島郡 拜師と見え  
陸田御厨陸田村とよもへ 大神宮の神社とも 神鳳抄 小尾張國 陸田御厨とある

卷之三

赤池村と云ふ康正二年造内裏段錢并國役引付に三浦平四郎殿尾張國中島郡  
赤池段錢と云ふものあり古き比久うううう支保三年沙汰明空が作の  
えいまく  
鉄曲

擇要の如き別紙追加曲  
居候が益ち本ハ享徳頃の古写にて節章々もの海道と云ふ河上畠園の  
多川浪うかと水のあくに行やと准へ心とくやん不破の里をのねび一間をのわすりにまづか  
汝もあらや結の枝うやまくもさかくじて枝まくが次ニテまうの清て行盡の我妻僕やからんし  
あやうく後次溝くの足近とくも駆けもそや赤地もううめんむすぶ系脣枯葉の  
尾紀袖められて芳蕪やかな萱はのれくもせきてちぬふひらきあひるぼうの掲ゆくから隣人を時  
以ハ夏の日れ勢田八坂りうるをあひひひりうるをきを浦すひ天照神ハ是夢に史  
もぐりぬ代ゆわと、神いと云の汝風むね吹送らニ村山くらきゆれどもやみ又云うやう櫻川  
を里するふこの行う櫻のまや一筋にあく、桜の夕れえけえうれしとどよちと惠縁  
まちふ足き

赤池木の成美の方にむかへ池をに接の大樹三株あり大風來候と水中入て今より  
むの通今街道の側も赤水の色紅く赤池と云ふ村名もこれより起つ  
とぞ美濃の各勢之系の北小麻縄の池とよゆ其他と云赤池と地中にて通ひ

其日人馬より三本の火小泡ひこぼと見ゆる人ひづくら彼老の淹れの  
地じ中なかへ近ちかいの解わかり井いのの清水きよすいよりて彼地かぢ小涌こわきりと同日ともひの達たつり

沼山萬德寺 長安村 真言宗も山城國醍醐の報恩院の流派ある  
ののもあ家の大本寺と称し、寺はまだ、院は元は

大うり  
天徳稱 稲葉景雲戊申年慈眼上人の創建

皇の勅願より續日本紀三代實錄寺に之鶴沼川決損餘

大神社  
かわらの  
川曲神社

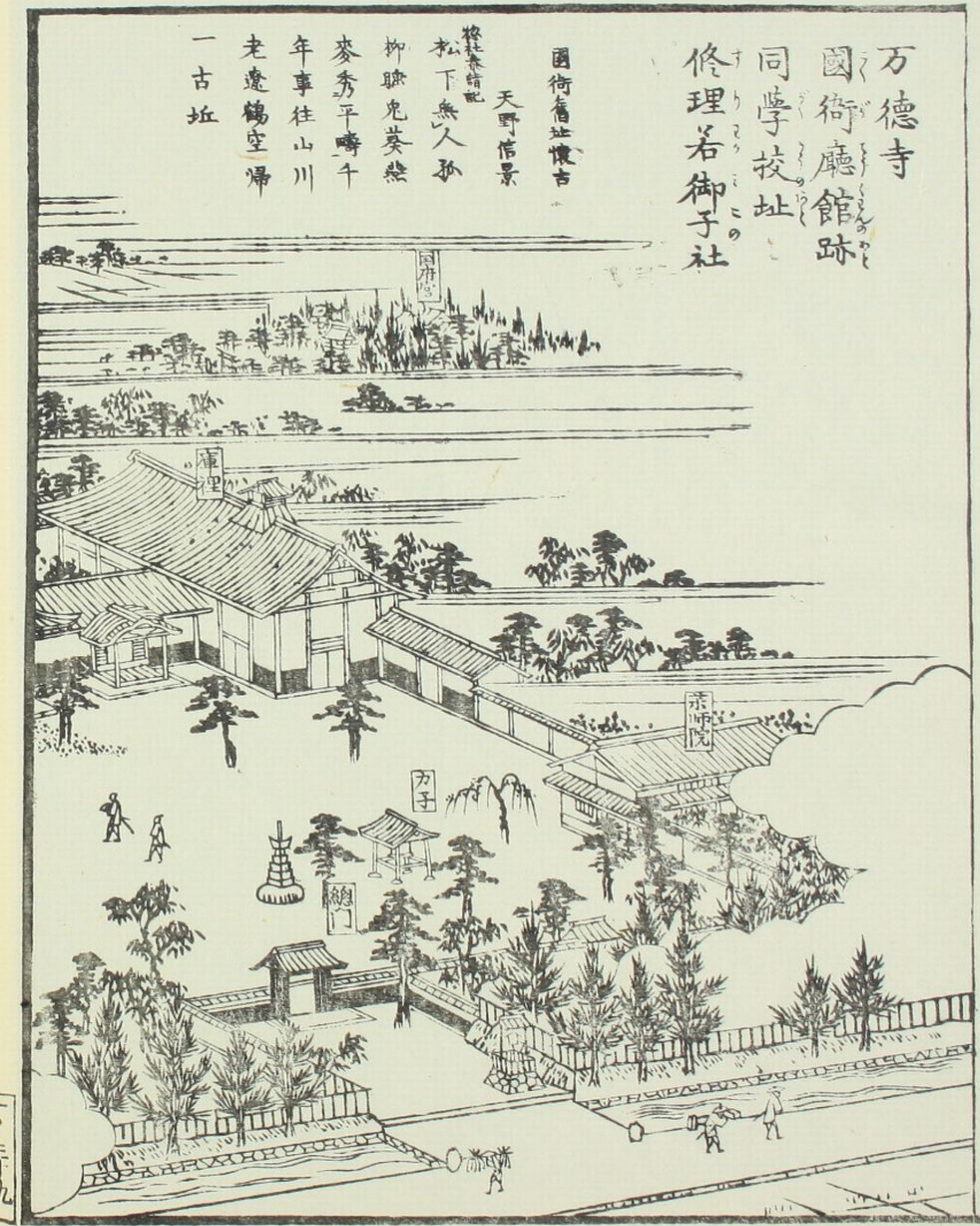


藤島神社  
神谷永平詠

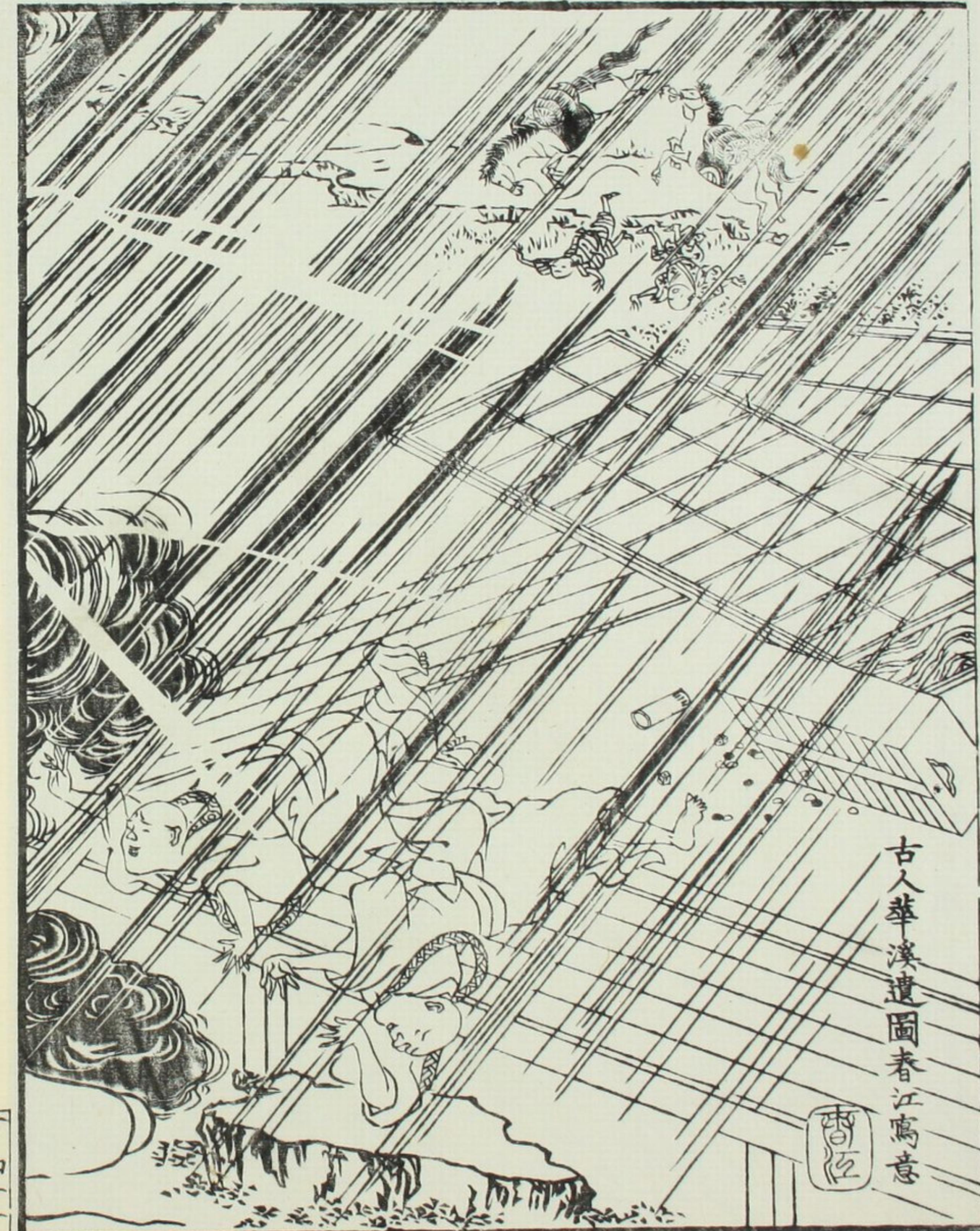
かゝりくも  
かゝりとさき  
木のえやそへら  
ひきるあ神と  
いつくかう人



香花



海上人の真筆と書  
て天永保延文治義元仁治文永弘安正應正安乾元延慶嘉祐曆文貞治嘉吉丈安寺の年号又  
寄進状古仙像多  
此像と作  
塔頭 藥師院  
養源院



## 織田兵庫助敏廣城址

（註）此村にあり故廣の武衛家の軍將く武衛家後裔の今川義康に之に因義敏と家督の爭論より軍起り尾張の軍勢と京都に之行て軍勢にすすりわづかに敵廣

（註）此の陣と拂つてゆかばにあ中の活へて峰起して十津の城と攻んと口一主ふじあひてゆう

（註）文正記小ノスモ

## 加藤遠江守光泰舊宅

（註）因村にあり光泰より作成として秀吉公が使（註）御の所（註）此の一人うち又と左近太夫貞泰とくら光泰の田舎本舎は後豊臣家小属一式功記顯しく修小甲斐國二十四万石と拜領一文禄の頃朝鮮征伐の軍將が加藤小柳家より之を名と冠す其陣中より卒者あり一奉眞ハ一人の死所あれば之と同様化す又か底左馬助嘉明も因村の人也豈能か仕生年せ一品と近江柳原郡の合我先鋒七人のうちの一人うちバ殊の感覚を給ひ天正十三年の秋伊豫木下本の城大万二千九百石と相応せり年月を追て後進一宣永四年二月十日奥州令傳

（註）若松の城四十万石とね丈りよりより世の人比べかず所

## 小池山正明寺

（註）小池正明も村より源氏宗も稻葉村源流より本もハ阿波院ゆゑの古佛されど作成多し尤甚の縁ハ行基菩薩の真作

## 四ツ屋

（註）井戸口村と六角堂村の界から起街道と一宮街との岐路から俗に追分ともいふ体奈多殿野りく人とりてうす温飪と云茶の名物とてても四つ屋と云ふも人々喜んで

## 浅野長勝屋敷跡

（註）六角堂村から長勝又ちとひて信も云の弓役うるそ

## 興化山長光寺

（註）因村より源氏宗開基九年月ハ定ムアノハ明應八年中清須見院末

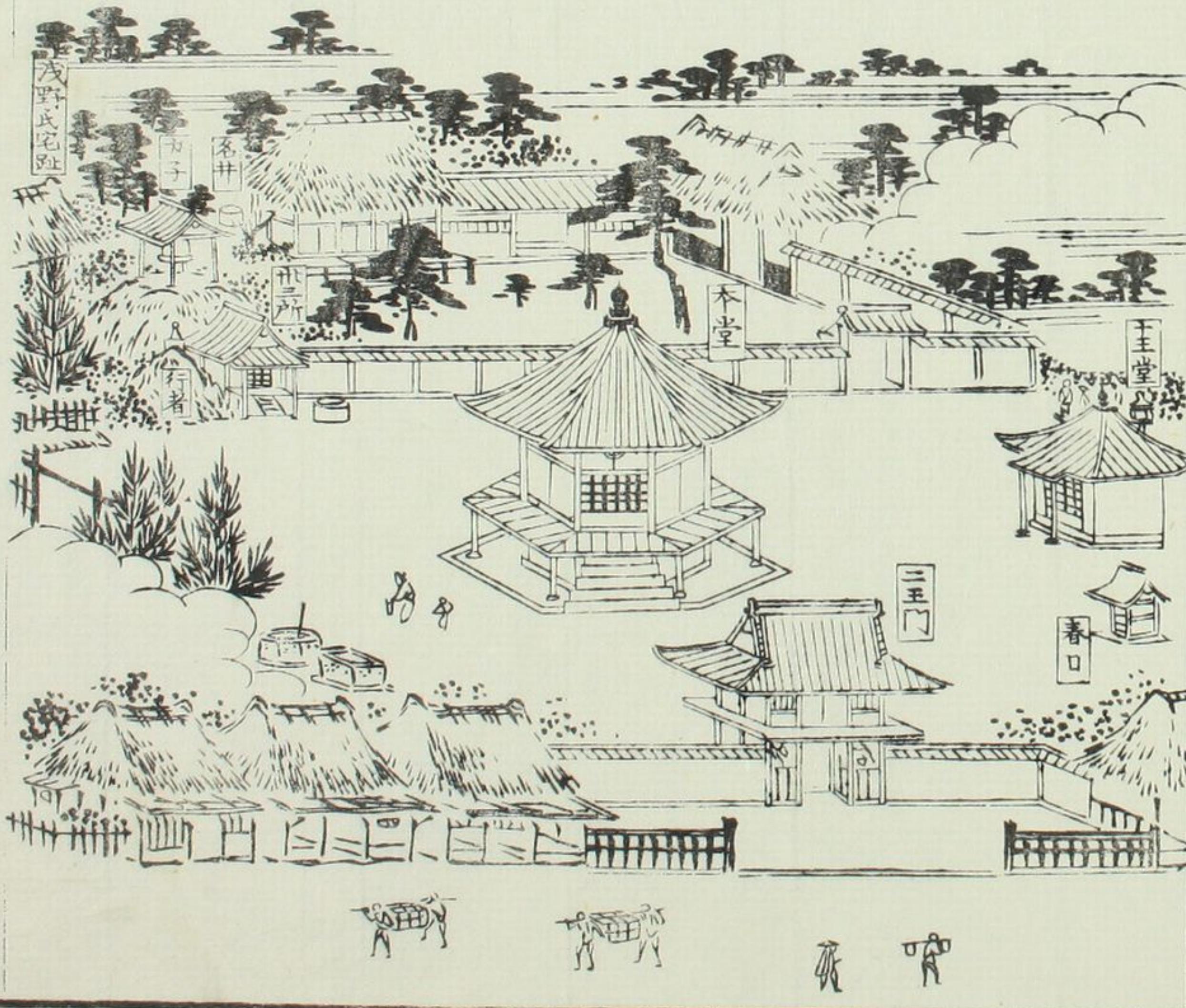
（註）奥一其後元禄四年嵐山長光再建次〇六角堂

（註）六角堂から地蔵菩薩の銅像

（註）天皇の仁壽元年梵僧一人來り一夜のうちに清須一高興地と云ふ事古今數え難奇代の傳なり

## 六角堂長光寺

（註）尾張名所記ニス此堂ハ武因  
（註）番通じ造る所本弓地藏  
（註）金に秉てゐる次大和国矢田  
（註）ちの地蔵を模もあく  
（註）古道能化と形も堂と古角小  
（註）造立



とてあふ六地蔵の一所にて諸人の伝作甚多く天を仰ぎう敷社奉詔記に堂のうちの板に書す。その多く甚中にまづいとぞ。のちのそれがほくへせふ何れかと  
の葉とらまくと化してアレリひのちまに油りて書くとの葉もあと恐くと書いてあると  
年號く見えぬとぞ又多くわざうとあるが、この葉の葉の葉とくとくと書いてある  
まづのり（ちよも）二王門 東の表 十王堂 春日社 卧松水 墓内焼肉の井さりと清  
信宗ト見ゆる 並木御井 信長公茶の水  
及び膳部の料小用ひあり。岐阜へ移らば一はも人夫小役してけんとれども其の傍者タ番に仰せ  
け水と服すとハ病と除へとソリ井の例か老梅樹より名づく佐多の儒者タ番に仰せ  
て卧松水の記と化し且臥松水三字の類と言へり。井上に掲られよ。寺領 尊氏將軍多  
兵大ふ遭ひて其記も類もソラバタスルを年号水と個て名のめゆき。寺領 くの寺産と寄  
附せと甚後天正十二年九月十日に百貫文の  
地と今いと退情とて今いかが多う。古鷗口 銘小天正十一年六月大檀那植原加賀守  
神崎西郡栗見田付大寺

の文字

### 草部御厨

日下部村と云神鳳抄に尾張国草部御厨と云  
伊勢の神領多く近隣小伊勢町村も

### 長束大藏正家宅址

長束村小ちよ豊臣秀吉公小仕一武功拔群の勇士として近江水口の  
城と賜ひ徒立位下に叙せ。莫も五年の私小逆徒小与く謀叛せ

りと死と云ふ。天の命うふ。梵舜日記小慶長五年九月廿日天晴長束大藏於江州日野殺  
害同十月大一日今度謀反衆三人石田治部少輔安國寺小西攝津守洛中大路渡於六條河原首  
刎三條被島次長束

### 大藏頭島

日下部村と云神鳳抄に尾張国草部御厨と云

### 飯尾氏城趾

美田村小ちよ鐵田大和守敏定の二男近江守定宗飯尾氏の子と云ふ其苗字と  
名のりあ蝶に位と武功あり。永禄三年五月十八日あふ鷺津の城

少く戦死す。其子飯尾左馬助重宗尚城と云ふ  
其事蹟信長記總見記織田真紀等に見る

### 奥田山娶樂寺

同村小ちよ真言宗

長野村万徳寺末當山つゝ八十八坊の大地と云ふ中世悉

### く荒廢なり。行基菩薩の開基にて永仁年中勝圓上人中興

す。所うち瑞光小丙成

宝永三年中島郡美田村安樂寺阿弥陀二菩薩と

再興。又彼佛像の胸内小正和元年十月十日の字うり像ハ行基作と

以て花園院御宇再興の時書。尼うり。三百九十五年の後又座

光と新め。其間歲次の蠻夷ありとんとあく。昔もかへりと見

え。ゆく母小太と云ふ。古刹あとども今ハ只一院のみ。あり因畠の字小

む。と云ふ事多。○本尊 阿弥陀親王勢至ともに行基作。て其の密丸

後印に少數。一三軸。寺室 不動明王 鳥羽僧 三千佛 建武四年寄進。兩界曼陀

羅 大永四年修補 涅槃像 永祿八年寄進。十六善神 天正十六年修補

其外佛画等多々。之に加え。其外佛画等多々。之に加え。

もかに畧す

### 平町田面

同村の西のうち起街道の名と云ふ四方數里目の至り限り山あく里をくじかん

てちまく其形と形り。東へ向く里民甚恐怖。を毎日を度して。つともかく度をの平田。他  
にあくまう。西ふ東ふ往來の旅人も是と歎賞せざる。かく。之に加え。當村小瀬のまく

毛見の翌日より六前刈兩日上田一日病人田一日自目より為福うる病人田より人有  
シハ一村より二田と那で助ひ毛見ハ毛れつてとやれて予め有りしも余振小遣と入るキ  
禁すら村の挂

行と云

わくとくや毛見の毛山毛見因とあら原一平町の町

本居宣長

大了につくまむひの木植小松田のりの景えゝも

田中道磨

枇杷園々集

猪ノ口や刈や因小焚夕

士朗

瓦堂廢跡

瓦堂廢跡ち井堂村よりも長興寺大吉寺西蓮寺等の大伽藍數宇廢絶す玉翁の生尤も生年不詳の爲め此村名と云ひゆづり地中より古瓦と

瓦堂の跡と云

尾張名所圖會後編卷之一終

